

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

井本

成形圖說

農事部

十二



特 別
二一
144
12

成形圖說卷之十二

目錄

堤防

水利

堰

壩

柴柵

石籠

木柵

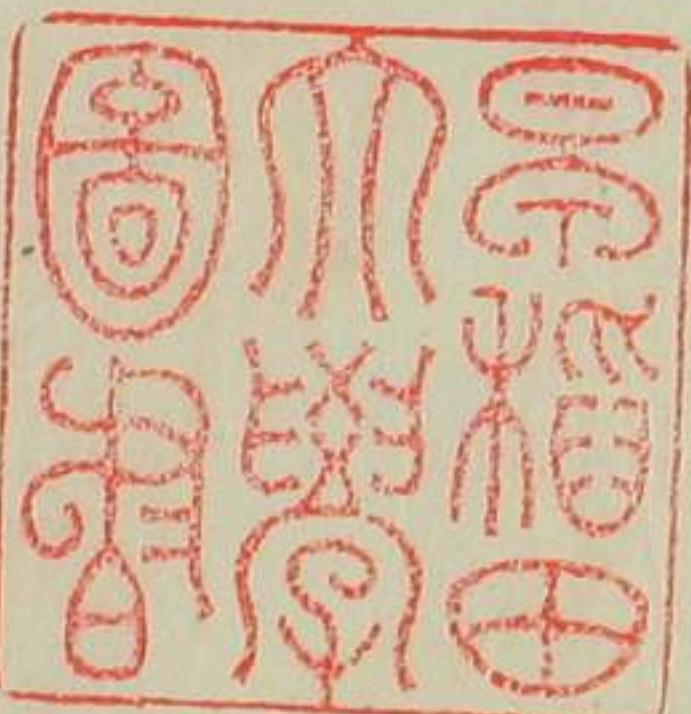
波塘

瓦竇

附旱潦

附捷

附架槽



成形圖說卷之十二

農事部

類

水乃久保佐

書紀

○凡植物の類を土宣す無くと久保佐

水利

杜氏通典

○沿革云井田廢溝澗

蕃名アーネホウデイングテルワットル

以上

ドロークテ旱

ワットリンジ潦

水利

水利とハ之く水土乃便利すよしと稱てアリト
ナキ故平十二策ニ曰夫助抑の方ハ子利と助て其害と
ナキ助抑ニ子利あり水害あり大又火食何モ大災何
ナキ助抑と助導キて田畠と昇き埋塘ヒ設て水害と抑堵く
ナキ李子火災と改め薪炭の法ありて火害と助燃ヒ火禁と
抑堵の事ありて火災ヒ凡水乃地中モアハ日の天ふ霧う

桔槔開門
筒車水碓

附水斗

附恒升車

附槽碓

水則水平

とく天より降りて水と雨とてハ天より渴むる河あ
卫國万葉よりハ雨と天津よりより又大洋湖よりハ雨
うきあすのとみよもれよ天日の光ハ合ひ合ひ等とは
やといてとて四方の風とやは寒暖の差あつりこと
大海の水ハ地おと環て壊よらヒミトモカレども地よ
高き豪邁の差ありて教オホ子ハ高仰タカヒクより衆あく山上には住む
行内金剛山ハ一千五百町乃西より山あく東より陽城ヨウジより
山上よりあるあるうめし西より山あく東より陽城ヨウジより
水あり人間ハつみふ及シテ木キを叶ふ鳥獸ともアツヒと悉く
皆天日の御簾ミヅタマよりす肩カミぬるるものあれも體ココロもまき
木草キナギよりまき天日よりさるハあしかばよ水生ミズタマと相

よのは天日と云ふてと云ふてきことなを謹按よ火冰
ハ天地の神物日月の靈氣より凡有生の屬ニ二の元氣
ふゆて起りと放り故よ人畜ヒトモノより以至精の金石草木
よもよもして火冰のニニ傳アハてきは壞滅變化ハラフてき
傳アハてきは現世の證明もあかりとれて土木金と并称
きのハ異邦の経ヨリにて余の植生ハ土木金とよ向アハ
らは次や後均シテ余の植生ハ土木金とよ向アハ
然當らうハ我邦のじりアハ事モノとあり凡天と無脚
そし手中より地と紙あるやと曰とみの靈モチキと名

て日水と歸^カレ夫。大祖^{オホミオヤ}ハ日神^カ一月讀尊^{ツクヨミミコト}ハ滄海^{アツシマ}ヒ
治^{カミ}ト^カリム^カモテモ城^{シタ}邦^{カミ}火水^{カミ}のニヒ靈^{カミ}水^{カミ}の德^{カミ}ト^カモテ人間^{イキイチ}生^ス出^ル地^{カミ}の^カあ能^カ人^カ
會^{カミ}シ^カ以^カ爲^カ日^カ水^カの德^{カミ}ト^カモテ人間^{イキイチ}生^ス出^ル地^{カミ}の^カあ能^カ人^カ
ありて行^カリム^カアリ^カ陰陽^{カミカニ}ト^カモ^カ行^カリテ久次^カ行^カ
マ^カア^カミ^カヒ^カト^カ自^カ行^カリ一^カ月^カ行^カリて火^カの^カ德^{カミ}ト^カモセ
ミ故^カニ天^カと^カ地^カと^カの間^カ行^カモ^カ行^カハ月^カト^カモ^カ行^カリ^カ故^カニ^カ行^カ
ト^カ海^カ水^カの^カ湯^カ洞^カハ月^カト^カモ^カ行^カリ^カあり^カ海^カ讀^スて火^カ水^カト^カえ
この二^カ方^カ氣^カ息^カ相^カ包^カま^カア^カム^カ人^カ皆^カ出^カま^カし禽獸^{カニ}魚金石
等^カ本^カ一^カ切^カの^カ物^カま^カてお^カま^カる^カゆ^カと^カゆ^カよ^カ及^カム^カ史^カ文^カ
名^カ火^カ水^カト^カ形^カ氣^カあ^カり^カて津^カ聲^カあ^カく^カ生^カカ^カは^カま^カる^カあれ

と隨^カよ^カ極^カめ^カよ^カせ^カし^カ形^カ體^カヒ^カト^カ備^カて^カ動^カ化^カア^カム^カの^カハ^カ此^カ
の^カ氣^カと^カ之^カい^カの^カも^カと^カつ^カま^カよ^カの^カそれ^カも^カ二^カの^カ氣^カ緒^カヒ^カ
あ^カる^カ人^カ一^カ小^カ天地^カト^カも^カす^カ男^カ女^カと^カ争^カて^カい^カ
ア^カか^カく^カリ^カ分^カて^カハ^カ天地^カと^カ肩^カ並^カい^カつ^カモ^カ天^カ空^カハ^カ地^カ
水^カ火^カ風^カと^カ四^カ大^カ元^カ行^カト^カあ^カれ^カヒ^カト^カハ^カ火^カ水^カト^カ天^カ
文^カの^カあ^カよ達^カう^カの^カや^カく^カ凡^カも^カと^カく^カと^カ火^カト^カ水^カ
も^カと^カ火^カと^カ洋^カニ^カ夢^カ事^カ通^カよ^カえ^カあ^カり^カと^カづ^カき^カも^カ経^カも
あれ^カハ^カ暑^カ一^カぬ^カく^カ水^カト^カい^カて^カと^カ根^カ本^カハ^カ一^カの^カ天^カ日^カよ^カあ
る^カと^カ火^カ水^カト^カ始^カく^カ宴^カニ^カ宿^カ出^カたり^カい^カつ^カき^カも^カ現^カち^カの^カ上^カ

て黙坐に在りて天日より生の徳
あるハ即水をもハ地よりいてハモニトシテヨリ也
地にノムアモニテ此の經度もアモト樹蓋の下も能
シシムルハシの膏壠よりも瘠地よりも有
ありかくれ所を深く打ヒ鑿あくゆヒテ村蓋ヒ作ミ
アミ夫ゆアシ石葉葉は大君ハ神アシマハアモロ
アシル者ゆ海とアレウシト源めもと氏の歴行ヒ得
キシムホシ大池ヒ源ヒアシセシク恩澤ヒ被里アチ
ハ民モ澤ヒ仰きアリテ天皇ハ莫ニ魂神モと源しませ
はアム大ム申ヒ此の池もアシムモリヌヒ錄しまリ

しや(畧解ト曰是脚獵の時ア反身ヒハツラヒトモアリ)
考古ニ阿シ又アハ石ニ中てアシテのあれもア石の沙礫
アヒ交る所ハ奥アシミヒ天水ヒ保ち温氣ヒ事テ古
のつづ温潤の氣アリイクモヒトシモ田と
アキナヒ上腴の眞跡ヒ得テ素アリ水酒アモリ也行モ
ヤシキアキハ行ヒアシモ民モアシヒ田ヒ營業ヒトシ
天日光也アシハ行ヒアシモ人カトモアシニヒアシナ
ル高原度野アリヒモ民モアシヒ田ヒ營業ヒトシ
トシム色ウジシムは夏の熱風アモアシモアシヒ
の照徹て水氣の潤モアシヒ梅雨ノ後土地も殊モアシ

日のゆう上より天日比火氣みきかりて西より遙り遠くとハ
あらうと蒸きうるとみてと火の温煦もあれハぬまし
こしされも北より南へ人間も多く出生しこれもせ
れに付きて蟹を殖ゆる水土の利常々曖地つ爾て寒土
に觸ぬきされふ水氣を常に北よりありて稻種を播ふそ
未更づりよく味あらきより故より人の氣質も少すハ強く
南方へ弱し凡南へ偏はまハ強柔也偏よりあ地もあ
く今之の根あらふと云て日本と古ハ變朴あれハ
破りくとくみありしあらめと松ふ唐り想ふハ冰炭ヒ
くさるの淫ありまえさつとも土よりて是れに日本
日本中土と根の偏土との人物とくべよのよ
北夷と古の遺制付る事ハあり

に都や一ハ北虜と漢との遠れにて南方ハ潔
足さるにあり是之大都會計地ハ北方に達ぬれハ南方
へ財散せと朝方に瓦裂りく偏安あまやうの爲あまと
いつ也○山堂肆考云三代以上天運主於西北故戸口莫
盛於西北舜禹分天下爲十二州淮漢以北居其九淮漢以
南居其三周公分天下爲九州淮漢以北居其七淮漢以南
居其二三代以下天運主於東南故戸口莫盛于東南西漢
元始當天下十之一東漢建安當天下十之二西晋太康當
天下十之三唐開元當天下十之四宋元豐當天下十之五
是蓋主運の因て論也本邦の在昔ヒ夷攻也

孫西州ス都シ 神武中州ミツコウを建タチてより華夏の威あ
る殆ハシマ二千五百歲而後人衆の富庶今ノ東武ヒタチのヒタチと
ゆゑ蓋天運西シして復東カムりこそし臣謹シテ之ヒトと拝ハセ始
崇神帝皇長子ヒロシマニ在リ之ヒトと豐城命ヒヨウキヨミコトとよし尚武の衆ヒサム
と々東國ヒタチコクと統治スヘヨリすも源彥狹王ミツヨヒツキサザ 景行御運東山十五
國ヒタチの都督スヘイと鮮ヒタチの而姓ヒメニ王ミツヨヒツキと慕ハシマふと父母ヒタチのヒタチも
子ヒコ諸別ヒツベツ王克ミツヨヒツキ先業ヒタチと憂ハシマひ雖ヒタチ古來ヒタチ地ヒタチと獻ハシマし豊城命
の後蕃衍東國ヒタチの人ヒトハモ出ハシマ向ヒタチて德禽獸ヒタチを享ハシマし政
北民ヒタチを得ハシマらか輕ヒタチおの川ヒタチ東國ヒタチ一方ヒタチの王者ヒタチと後
世風雲ヒタチの嘗ハシマ々ハシマした將軍ヒタチとほもヒタチ人ヒト盡ハシマ東國ヒタチのヒタチと
御

さああし始ハシマ日本武尊大ヒタチの嘗ハシマて東夷ヒタチと征伐ハシマし豐城命右
武ヒタチの指ヒタチと執ハシマてヒタチ東方ヒタチと法ヒタチに嘵風ヒタチ浸漸ハシマ東ヒタチを所處ハシマ故
やヒタチと知ハシマきあり抑又ヒタチ地勢ヒタチの天ヒタチ爲ハシマふあヒタチす宇ヒタチ○水土
地理ヒタチとづきのヒタチ地ヒタチは是ハシマされハシマわヒタチもと武ヒタチのヒタチり
うヒタチとすハシマし一國ヒタチ一郡ヒタチに就ハシマても初令ハシマされハシマ人ヒト寧ハシマ
其ヒタチ地ヒタチハヒタチ水ヒタチ利ハシマあるハシマとヒタチみヒタチめヒタチ居ハシマ居ハシマ人ヒト也ハシマ而ハシマく
盛ヒタチや々耕種ハシマせんハシマとすハシマとも向ハシマ地ヒタチちヒタチと水利ハシマあるハシマと
民居ヒタチせき地ヒタチハヒタチ自ヒタチ然ヒタチに荒廢ハシマとヒタチあヒタチとヒタチか生ハシマるハシマ穀物ヒタチも
もく化ハシマぬハシマとヒタチ漢書平帝紀ハシマ募ハシマ徙ハシマ貧民ヒタチ至ハシマ徙所ヒタチ賜ハシマ田宅
什器ヒタチ假ハシマ與牛犁種食ハシマとヒタチえさう是ハシマ八廣深ハシマのヒタチ地ヒタチと移ハシマ面ヒタチ

と作立の政あるも志あれとも南地北民と少方より徙さん
とすきハ配所の竄ナガサやうみ陽ヒタチ海シマツあり人氣
の常に陽ヒタチより土オモと積ナモの情自然あるゆゑんち
里ヤマツ○法妙ハシモト山ヤマツ山ヤマツの家ヤマツ山ヤマツハ岐間谷門の
比多くも山ヤマツも山ヤマツあり旱カドリ歲セミハ柏カスレとも月ツキある
里ヤマツく窓カサのり以シテし水ミズ國カニハ因イニシ多く雨カスレかちカチ山ヤマツ
ありよりよきとも洪水カク漫マツル時ハあハてあハ度カタマリもあハり
但シテ既アリよきともひき無ナシやとしきハ一イチ廻マツリのうちハれハ
山ヤマツ田タケ村ムラ田タケも互ハシモトに間イリ廻マツリて以シテ旱カドリ潦カニの災カシマツありと
モ一方ハ若カニまナシとのそりハシモト海シマツの神カミ天孫カミに教タマシ

アリて兄作高田者君可作アケタタメ湾田兄作アケタタメ湾田者君可作アケタタメ高田爲
然者吾掌水ハシモトと云ハシモトいハシモトあハシモトより高田ハ乾燥カドリの地ジ雨ウ而宣
し湾田を平溝ヒラカニの代旱カドリに宜シし海シマツ沖水カニと滅マツルて旱潦カニの備
と存カニり毛カニ言宣浅カニみハシモト也凡火水カニの性火カニを上カニもえ
又水カニ流カニの纤カニ行カニすハ程如カニの貌カニ麗カニ姫カニウハシモトし太川の解カニに
開カニとハシモト其ハシモトと直カニきまに極カニきりハシモトてモ流カニと尊カニ祀カニモ流カニに
御カニ走カニる跡カニと耕田カニなハシモトに昇カニめハシモトくハシモトあハシモトとハシモト性カニリ草カニ
或ハシモト外カニとハシモト久カニ左カニとハシモト淺カニし右カニとハシモト衝カニて或ハシモト海シマツ浦カニとハシモトあり
ちハシモトにハシモトありハシモト再カニ修カニ事カニとハシモトもハシモトに即カニてモ費カニ射カニる負カニう
御カニ走カニとハシモト委カニ池カニぬハシモトハ一イチ井カニに
のハシモト勝カニとハシモトなるハシモトときハシモト山ヤマツ陵カニに壊カニ裏カニと屋カニ塚カニを穿カニ海シマツもあハシモトと
御カニ走カニとハシモトもハシモトもハシモト千カニ勢カニ急カニ駆カニとハシモトを高カニし缺カニを烈カニし有
れハシモトハ逃カニ去カニとハシモト身カニあハシモトとハシモト常カニに石カニ御カニ色カニ見カニつハシモトカ
名ハシモトに城カニすハシモト小ハシモト川カニ駆カニしハシモト身カニあハシモトとハシモト匂カニにあハシモトつハシモトみハシモトとハシモト人カニ鳥カニもハシモト見カニ

う焉
なし弱女比伊那のハ夢寐するより代へいくとくふ限
ど生じしめハあと教す丈のみに猶もとみくもサハ男
と神井もて其姓に順、よりぬかあし輓近浪華淡海モ
とゆく人あるく懸巖を撫巖にて亦を行ひ深浅に志
はれと吾邦ハ輿地南北經既に更名して恒川濁流北流く川流の浦に入ることを
くあれと經既に更名して恒川濁流北流く川流の浦に入ることを
宋紀水圖北異と載るやうと斯邦ハ赤國云うり田
地の水と達の放つするあと己の田みてハ父子兄弟
の分地ともへとも互に告すてを一切りあらわれ故
寔トシテ 田放溝埋藏捕絶亘あくと罷科よ深く生
よりくとめて手法と祀らるるよし聖人比達ハ莫セ

よ流
澗等子涸る及てハ農夫奮とあく徳とくと田畠と走
まゆりて己くう田に流とけと浸なり 梅山ヨリヒヒ
み引すれ移ふとお言ふ水脕 月中に水の浸ぬる
於てハ夜に急て窃よ他人の田を毀して己の田へ浸入
ありて民事訴訟ふと毎年あら歳内付申入和
河内ハ葛城山と中央みて國界ととて妙子葛城山ハ北
夷良金別の衆山よりあ然せに於其山冰脉ハ一月
山脈連了の間ちすみ里とくら其山冰脉ハ一月
左右に分岐とくらかえ稻田に付する上流と大むけ田よ
アホに多々重いとて多めの文歳と早冰やしき

皆あしませんのまゝ堰坊川除あるのあとすく常界の
入組あるもの堰よし歎よあはうるのみとくわざと
いくやうくことせきりそれ輟耕錄袁介踏災行農
家争水如争珠と似て之按古事記に天之水分神國之
水分神わりほな分ハ分配あり万葉七三芳野之水分
山とよひは大和とてくわ分の大和河内扶津安藝等
の所よ水分の神社多し凡てあるもと能し功と浅ちじ
るやどりありあるよ此社一と大和の内多きハ
大和より第次の事ありきふるよ田水哉敵かとまの作
ありしもとよりは今用ひかう溝渠條らう

の吏とおれし出雲風土記より用水所集とありて用一
ハ田の字よほとさくハ田みと用ゆといふと既す令
よも出くふきあうり東鑑文治四年三月十九日遠江
守義定使者參着於當國所領今下人等引用水之處近隣
熊野山領住民等相支之間起鬪亂相互及刃傷云々戰國
策云東周欲為稻西周不下水東周患之蘇子徃見西周之
君曰君之謀過矣今不可レ水所以富東周也今其民皆種麥
無他種矣君若欲害之不若一為下水以病其所種下水東
周必為種稻而復奪之若是則東周之民可令一仰西周而
受命於君矣又晉書云杜預修郡信臣遺跡激用漁渭諸水

以浸稻田萬餘頃分疆列石使有定分公私同利衆庶賴之
號曰杜父○水の持りといふハ陰陽旱潦と云はどりて
みせりや方と接するこより五年有常有田に水の
瀧を宣むれしく二才許ひハ端よく穴のりあり是
が土上田地はもう中用を一往歩ふ水六寸をも候
あす便にて田ハ四寸をもと太寧と○旱魃の患フ漢
極難ヒテ万葉の歌ニ雨障日の蓮バ樹し田を播し畠
毛朝海に萎枯過と諱也後漢書獻帝時三輔大旱帝遵正
殿請雨遣使者洗囚徒原輕繫是時穀一斗五十萬豆麥一
斛二十萬人相食啖白骨委積帝使御史侯汎出太倉米豆

為飢人作糜粥經日而死者無數帝疑賑恤有虛乃親於御
座前量試作糜乃知非實使侍中劉艾出讓有司於是尚書
令以下皆詣省閣奏收侯汝寶詔曰未忍治汝於理可杖
五十自是之後多得全濟○新儀式曰若四月以後八月以
前久不降雨必有請雨之事中引神泉之池水灌京南之田
人災旱尤甚農業多損或降詔命減除服御常膳之物又免
調庸租稅之未納又遣使諸社奉幣祈請就中丹生貴舟二
社別令祈禱或令奉黑毛馬基長の歌よ神垣小引駒の毛
乃乞乞きて雨雲トノ一丹生の川上ト部兼俱記曰一
月炎天連日萬物變色又曰八九月間淫雨不霽必有祈禱
詔奉官幣於十九社

之事又於二社令祈禱奉赤毛馬と稱り是王坐の恒れふ
是故ニ後醍醐天皇の大師寺山里ハ丹波の山上田と
近し河ハもれよ五月雨の空兼俱記曰
九天覆雲詔奉凡隆旱ことに天使と丹波本舟に坐て
官幣於十六社雨と云之め玉とこと史記とと號を始村上天皇康
皇元年六月大旱徧禱祠宇終無所效於是八月甲申朔天
皇親幸南淵河上跪拜四方仰天而祈雨即雷鳴大雨遂雨
五日傳潤天下九穀登熟於是天下百姓俱稱萬歲曰至德
天皇臣國柱謹按吾先侯大隅守第レルレ之傳也
御より身と彌て雨ぬと残り苗代も涸てひどく淺モカシ
若生の候ゆとあり是もく民の歎也モカシも度矣

百載一村みハ旱禱の難とあらずのあゝ是偶也と云ふ
へやんが夫やまとくはアビト勤ラムヒ立了至誠
惠神と寺やらしくはアビト勤ラムヒ立了至誠
河苗代々モセキくせあまひも神あゝハ神と流
うなうと行とて寫の内アマヒ事無とけりさりし古今の
事アマヒやまや教ハ人乃らと桂子アマヒ事無とそ
あれどもとめり承は人乃らと桂子アマヒ事無と
以寄とハ邦の言ハ内向あるは御のうひい虫し
西土内字とめてし天皇の志毅と

鮮大旱洪水の時止雨請雨國王親々努めあり鄙野
では地頭ひまて靈鏡を祭ふもとえり又沖繩王城間
切玉城ふ玉井もと靈泉あり國王毎年雨請の事あり
え年沖繩旱の時國王の説の歌かくてあと民の事葉
うれいばめぞれともそや河まつての神子ふもと大兩
傍せらり河あつくハ海祇もと山あさりよ豊見城高嶺
あくよ山嶽崎て故城の址多しけあハ明か年中潮平
魏雲上土作の大島つ櫛島也一内の活也海祇ハ譽を彌
哉多すあくよられ古事記吾掌水、と仰さハ祈雨の事無
宣あくよれとくよすと和訓葉よ出やり主事矣あくよれ

よ復ゆよも哉、文德寶錄曰嘉祥三年詔以武藏國奈
良神列爲官社先是彼國奏請和銅四年此神社之中忽有
涌泉自然奔出溉田六百餘町民有疫癘而愈人命所繫不
可不崇祀之按ニ奈良神社ハ田道の靈社也田道ハ仁
伊寺の水下ニ戰死した靈大蛇ヒ擊し村軍利あ
ヨ今又奈良神水旱疫疫大ニ元ニ功徳あり其靈神の赫
著觀るべし但享和二年六月陸奥國牡鹿郡蛇田村ニ田
道公の墳を土中ニ獲云モの城者しか云ひ巨勢別瀧
村の名ニ縁て傳仰せしと考ゆ按姓氏錄曰巨勢別瀧
或は官社ニ引收或は姓氏と賜ふ皆水姓と重り云々故也
解機術始造長械川水灌田天皇大悅賜械田臣姓此等ハ蛇
小し斗因向志縣那馬閏田郷柳水流とづけ村の谷り
絶てハ溼氣をあぐり一キメ寛政八年夏の根是より忽清

水大涌出ありて水勞稻田于解の用多と溉に爲し
凡源委あら竹よ泉の沸出一と淺くある乃地中よ
循環あるかとねりて爲し又古事記云御井神乃主之
井成作て民の利と無一才より御功ありしと稱す
王曆云凡欲穿井處於夜氣清明時置水數盆
於其地者何星光最大而明一定必有甘泉五雜
組云遇深山無泉之處掘井一二丈不得水者可束蘊薰之
道及砂磧之處火烟不得出必尋泉脉隙處潛通即它山數里
而密覆其上外泉皆能引而致之烟通則泉流矣北征錄云尋泉入山遠
燒之猛火而閉一小穴相通四望之但見烟出之處不論遠
近掘之得泉肺也妙哉石山中即近石掘之如山即草木掘
之砂磧擗高處掘之此能救急但烟出多水惟深更妙亦但
尋煙出處皆有水一食頃烟未出者再開一穴求之無不得
泉肺也宜博志之朝鮮師律提綱云營邊如無水者以地中
葭葦水草之處及地有蟻穴其下今有伏泉可開井取水又

尋野獸踪跡太路不遠有水如遇緊急水隨行者須用羊皮
渾脫或大葫蘆亦可是等の一件国土沃溝の用多
きのまよおひて小集義の書云山は國を立て第一高
山よりて君の象なり山川草木つきて土砂の川谷み
るる上より人の満ち抜けのくつよくれりとし渭
洛つきて夏亡いもとめしまむれりといて渭客
のつまむれりとハ水上地山の草木つきて神氣うる
流水注第よりて入り大雨、とて土砂を薦し入て川
はうつみ流ふる山とくわど川源ばくゆくむぢりれ
みいみへと流候よ地とくまよへと山大澤
は封せぬ山はれと通し雷斧を助くるす神靈の幻程あ

而播磨備州の浦尾より付する敷郡の、と紀北の夕立を
神氣及む揚ゆハ淡路島より起々夕立とて震ひ候ゆち
小豆島より兩度あり京都近江などは六七月の旱より
タニシテ湖の沖氣はよきつあす京までと夕立おほ
し里子上北よつてきて涼山多しとめあら高山崇嶺々
さきよりこれに靈氣もと淡路島の、とさを奈良もとれ
神氣と強烈無事なびれを神氣もとし又夕付法圓
寺に松山やねハ奈良山やとさをやゑあとれ山ハ多
志りりてと神氣のあまけふをなりうくし松山には下
室はせとみまて虫をねよかまく除雨露田畠より入

てハ毒とまざりねハ浦底をくよ相無乃木多也山を被
木よまく、なし紳書曰越前松原屋某代よりて國乃
東南よわる向山より今ちへつゝキツヒムニ重もと
みふす里と美濃峰へてぐくづ行り木立をすと
とすとばかりなしめひと二方をまくせを新まえとすと
よりり國ハ日よおとろづく行ひをとて時よか
きよつまくまくに奉河東吉川をくじとくよそ
のあととつへハ本下赤橋川を濱ハかつ川とあ此
川の水ハ波つづり安してあらやまやまきてあら水
う付ハげ赤橋川をくじとくあらきてとお橋ま

やうじきあつれハ少周乃大雪行りとててとてとて
岩舟もとほへありつゝハ春よとあくとまく指ノ君
解て後御こは解ゆせりかくま雪ふかくのぞとしゑ
みゆれあとまく拂てすとすと拂し雪の一村。よ解え
らんふハ本トの人あくしをゆのキマリと人瓦屋
とさる。とさる。とさる。とさる。とさる。とさる。
捨てゆく。いきとく。いきとく。いきとく。いきとく。
雪深くよ解き。とととととととととととととと
用みそむととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと

とととととととととととととととととととと
いとととととととととととととととととと
の陪臣人苦中書父。ととととととととと
不納とととととととととととととととと
是と伐剪て代あくはかく。あ納する。及ととと
じ農夫。いれこれあくと。ハあわのふせど。とと
つとつとつとつとつとつとつとつと
よのやありハは。とととととととと
れハあとうとうとととととと
好じくうれハげめて。ちとうぬ万葉よ。す雪ハあ

すあふりそき溝のわづいの事の實あくはくよくう
と山へく是までありハアリテ崩くかよ塞くありう
されバあリムハアリムアリスレトムセリトムヘ
卫凝古ハ水氣あリムアリスレトムハ蜜雪モ充ヘシ
室モシテ溝きかよみ氣亨テ取しきれハアリムハアリム
うんと上田祐成ハ叔なり聞見錄云王荆公好言水利有
小人詔曰決梁山湖八百里水以為田其利大矣荆公喜甚
徐曰策固善決水何地可容劉貢父在坐中曰自其旁別鑿
八百里湖則可容矣荆公笑而止予以爲類優旃渭替漆城
難爲陰室之語故書之方の利を況よの也何ぞかくこ

そあらざれ當社もあらの利口發明ヒ喜てゆくと計さ
るハ済すハ核七の事日ちくして來ぬ按よ山水比制
いふゝ每よどき淺多きあらり弘仁十二年太政官符曰
一應禁制所損水邊山林產業之勢非只堰池浸潤之木水
木相生則水邊山林必須鬱茂大河之源其山鬱然小川之
流其岳童鳥爰知流之細大隨山而生夫山出雲雨河潤九
里山童毛盡谿流涸乾五畿内七道諸國山川海江濱野林
原等一切收入公私共之但山岳之體或於國爲禮事須蕃
茂勿令伐損中大堰之岳專有禁制小川之山不在禁限因
百姓憚遠貪近川上山林任意伐採至有旱年既乏苗焦動

遭損害職此由也望請川谿泉源溝池等縱溉田水邊山林
敷澤不問公私悉力禁制並莫伐損令曰凡取水溉田皆從
下始依次而用其欲緣渠造碾磑經國郡司公私無妨者聽
之即須修治渠牆者先役用水之家水足後耕者自今稻田用
水足保之水之二條を標して他日督査を極まつ材
質とす

土積書紀○即堤坊也三代實錄貞觀十一年勅

田手亦土手と書あり田中
堤坊堤防義同し正韻築土遏水曰堤壩澗亦堤より○石

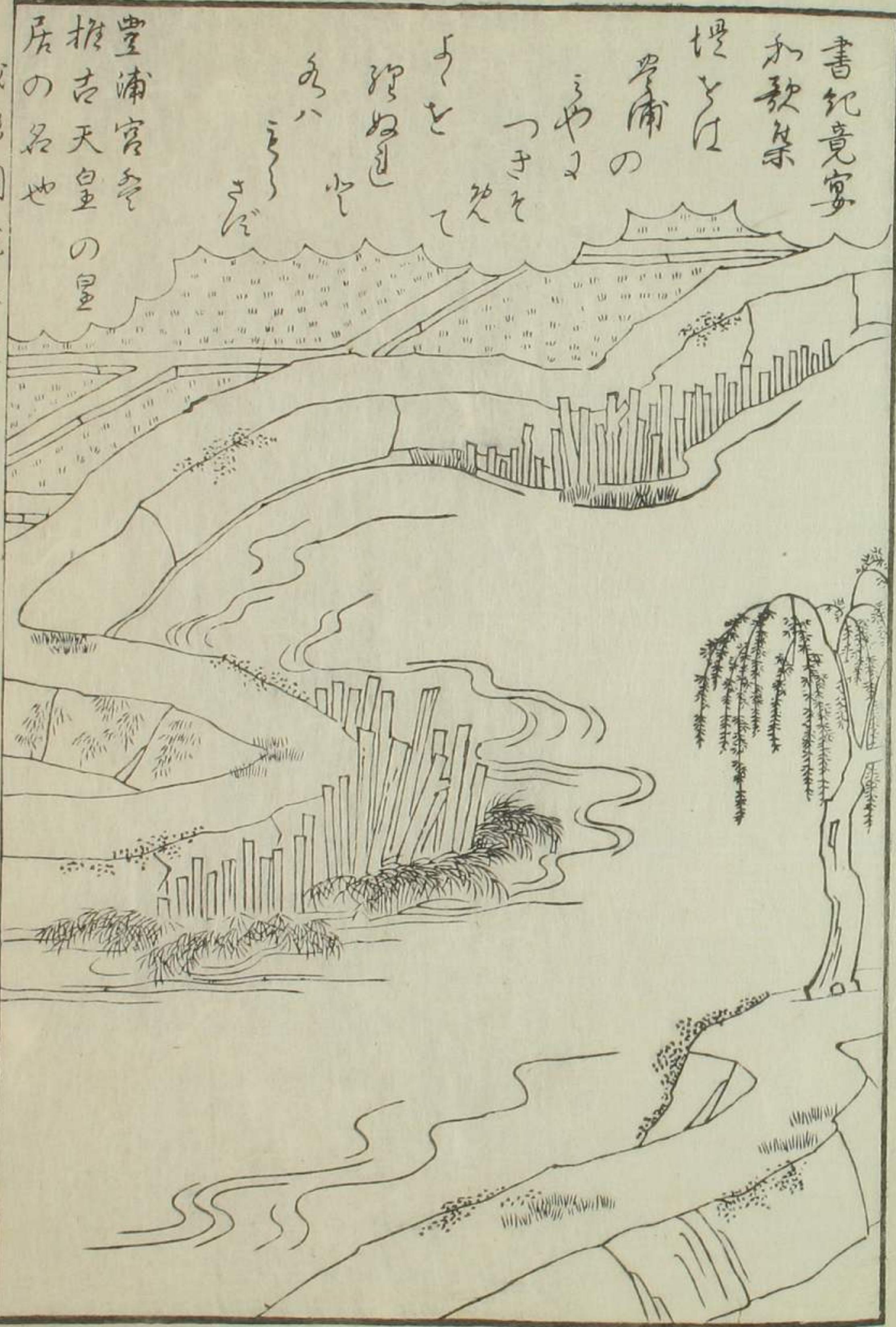
舊坊為無所用而
壞之者必有水敗
蕃名デイキ

水ハあく防と云はる地官の祕訣とも云ひし
モ御豆ノくみの激やうにて人にて有しもとすらも
あらしよハ澗壹モテテ勢を平小じよ術あリ澗壹
ヨテあはしき事けも流を北より南へとせ直よ
東南の下へ向て流がんやうに導くと繁要と云はるは流
き門あらじて隣の表ふ水渟あるとほのこゑあらハ
少か可れゆけちよとほは諸水少く更に少れやう
もあせと云ふもとすら隣の澗ハ多す一埴土岐里の處

うるうらら水のまくらぬりゆき出水の流衝
の直よ高きはみ殿なり○水あて堤わ波とき風のあと
く候してしきの力と抜て水せふてお堤と残すと
多方ハ六六皆御まよし水の津弱よすむとハ下知と
廣く築す○堤は坡の附脇付上、春ハ川表とす後付
よしと植し、細ち葉の根ちえ堅實ば、堤裏と築
し共して冬深く了土よハ反れも、土肥草茂り夏
暖く、秋冬よりて土瘠て崩安し○堤川表よ柳
うゑ面し何より本木くと上高きを堤の為よしに柳
ハあと偃垂てよし、細葉柳ハ堤の脇よさし、丸葉柳ハ堤
乃根よし根とせてすけよ柳ハ土

とあつて堤の足、まよひのそ万葉よ柳楊根渠とつ
かいつりあ人の事ハ实用式曰凡神泉苑廻地十町内令
京職裁柳町別又堤の外よ荒地あけ櫻松、檜栗の樹ヒ
植てよし川水出る所水井とあり兼て薪よ充廻し今營
繕式曰凡堤内外并堤上多植榆柳雜樹充堤用と是ハ
堤井せきの用よ設くるよどなり駿河風土記曰楨田堤
郡民植柳栗一千丁食充國府師家其食鹽○堤又
崇つあるよハ堤なりみばれ、ひりえあ難處と云ふ小
川渠よとすけあよも業付をうほど渠小口とて作ふ
てハ立ぐ渠よとく渠人ハ渠薪と云ふとて○堤

莽端ののあまり斜あひや大軒一傳の海のたる
 し天智紀三年於筑紫築大堤貯水名曰水城むりしハ土
 と築城キツウと云フ一卫然巨川サテホカふごの水衝ミリよく隄決キふむ
 づるまハモ地形シキニ隨スルて二重隄ツネイと設スル其交アヒ平日クニテ
 田疇タマツふかし立タチて可出隄ダシタマツ此ソシあり凡隄タマツと修築シキツよ
 ハ隄豆タマツシキと堅固タマシカよすべし隄タマツの裏土ウラツチと飯ハラべうらトホガと
 川中の高タカいの土と固く據タマツて飯ハラべしと壠権ハリといへ
 ○易タガよ千丈タカ之堤以蝶蟻タテハシ之穴潰ツツヒといつり隄タマツよあ漏ツツヒ
 ハ速ハヤシよ壅ツツヒへし凡隄タマツのいどりみ漏ツツヒもあくタマツ隄表タマツエの下
 伐木竹カクモふくらはこタマツはこタマツは刺心ハリえハ水漏ツツヒより謂



例 漫畫は必ず其の時漫表は茅原敷とおけ漏穴と窓く
 窓し又右のこゝくまでを漏穴加く、まよハ堤上の
 馬踏と馬踏ハ堤上のこゝく水表の方へづや箱桶よモ
 れハ箱桶うは堤の上と漏穴もれ易し此時ハ塙沙茅草
 うとせのばせを土と重々く重しき箱桶よモ
 漏穴加くまよと水漏の上行ふ土ばかり山とおぼえ
 よ漏穴開くあり堤を留みちづの上北土おのつゝ
 蓄すと水止むなり○西土宋朝河決の事度くらもて文
 彦博う漫岸の決溢ハ天災もあらずと寔は人力不至也と
 いひしあとととぞとの今に至し



井割 和名鈔○割ハ壅也。凡水子井ト以て壅ム多シ。

井割

皆水を引取る所あり。田井より引く者曰井割。

為世人

新撰字鏡

井手

万葉集○手ハ道あり。

堰埭

和名鈔引唐韻

堰埭

壅水也。書壅水為埭。曰堰。

壅場

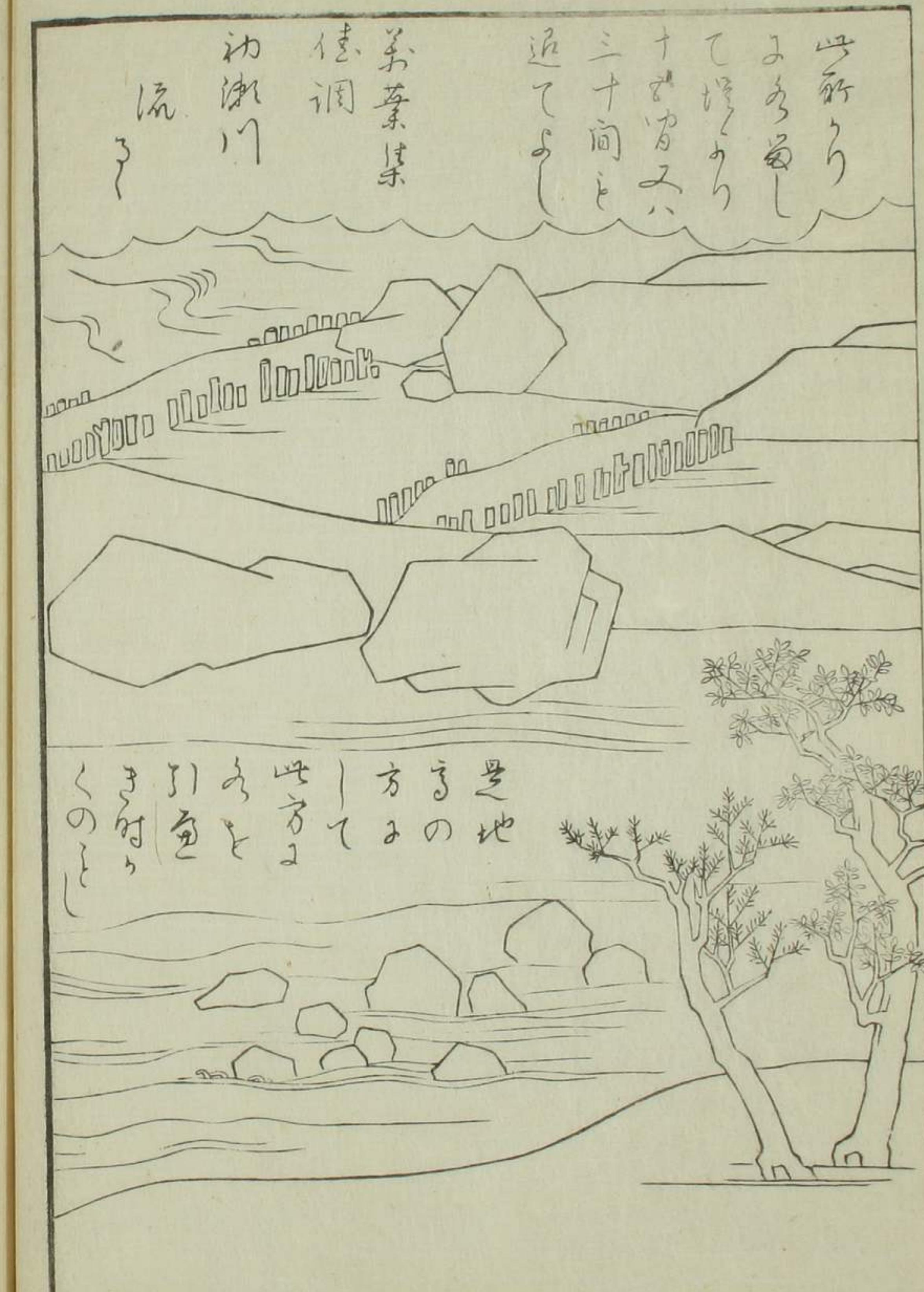
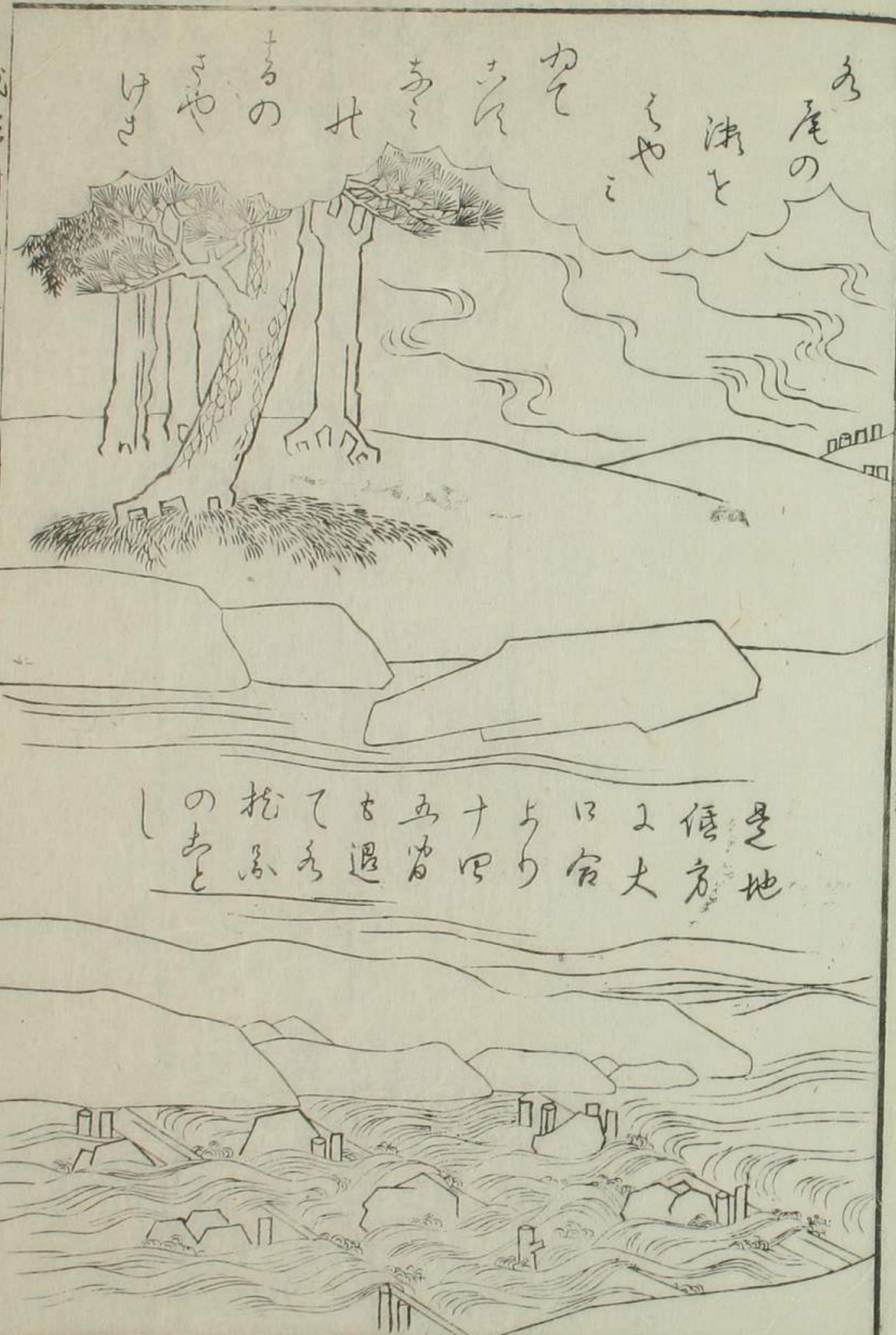
字典壅場以土障水也。魏志劉馥治吳塘

諸堨以溉稻田。

蕃名力 パディキ

今義解曰堰所以畜水而不流者也。川を壅切る所方より
仕出しがのま中やく壅蓄せし大川と壅切れば源を引
ふく見合無し。是ビノに合ひ。理道要訣云秦以李冰
為蜀郡太守造百丈堰灌田數千頃蜀以富饒。○川壅蓄か
御れ時ハ土石ふと儀入させ。大川の所一前方より

おうけ塗毎し。○川下窪所ふく押埋みを水枕てすと
のセニ皆はふくつくり川の恰好より入付ふ塗し。川
の底分アリ。すより十石或二十石と下りて。是のことを
く水枕アリ。てめヒ御くよ地高の方へ引あひ更し地
窪の方へ引よびある方へ水深く流りうちれハおの
つう窟くもれも上地低き方へ砂を押み埋ふ塗ふ
きをうよとし通鑑魏紀云將濟豫作土豚遏斷湖水豚
亦作土塍土塚以草。裏土築城及填水也。○容齋四筆云乾道九年秋贛吉連雨
暴漲予守贛方多備土囊壅諸城門以杜水入



柴 捩カラミ 万葉集○堤ハ土みて多ヒセキ

柵柵カラミ 木竹子内支盈于柵柵

三才圖會排

水柵カラミ 農政全書

柵柵カラミ 字典柴別作寨非是水柵若溪岸稍深田在高處水不能及則於溪上流作柵過水使之旁出下既以及田所

蕃名力下イ

東鑑泰衡於阿津賀志山築城壁國見宿與彼山之中間俄構口五丈堀堰入逢隈川流柵○古今集又秋萩ヒ志加くもかせて野の國にはなんとぞ音のじめけと頭眼のもの萩ヒ折伏するといひてあがみとも柵の字あり

荒籠カラコ 古事記作八目荒籠取其河石合鹽而裏其竹葉又如シト此石之沉云々八目の荒籠とて石ヒ裏ハ即今乃石籠の

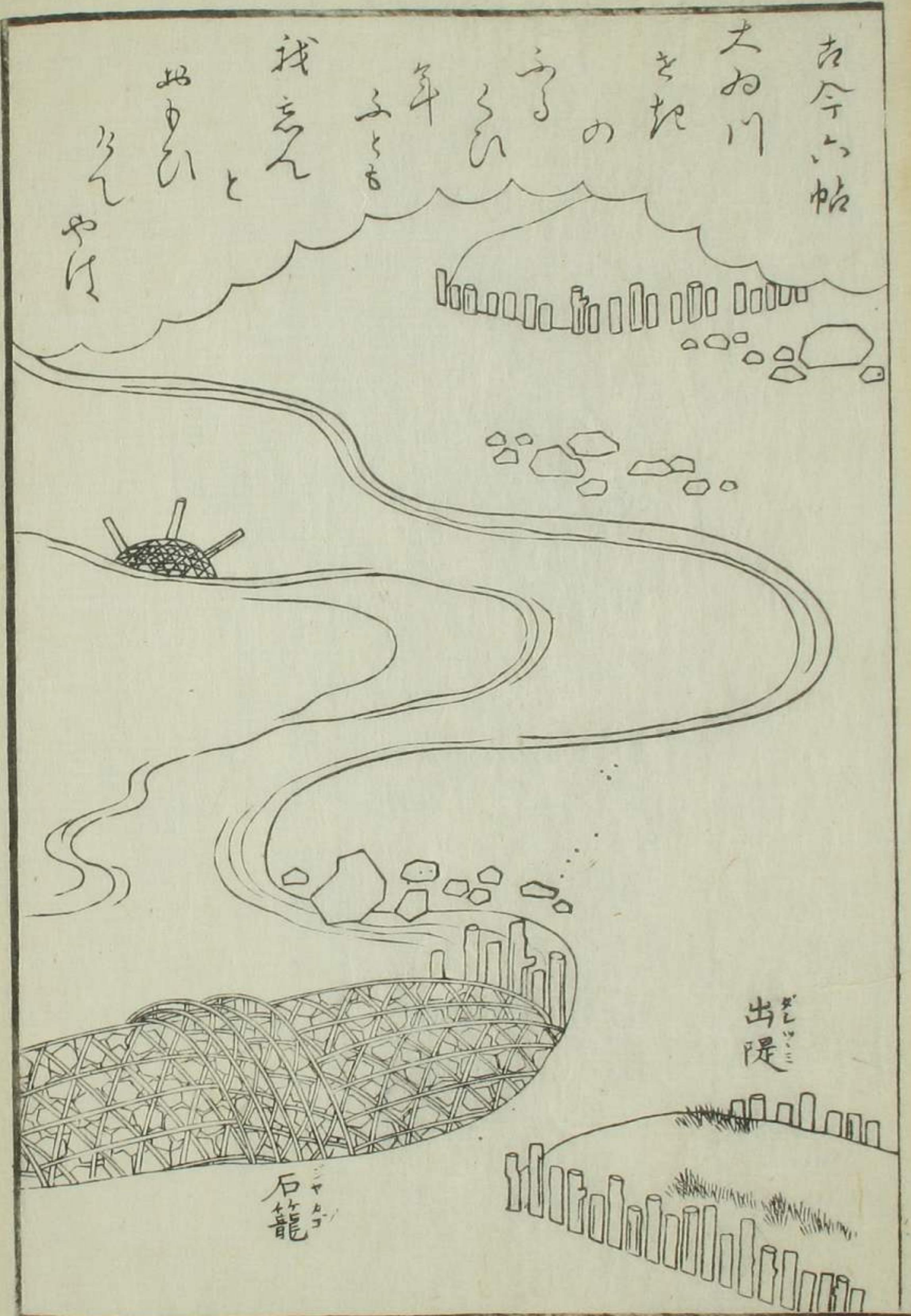
漸カク 荒籠カラコ とハモ眼
石籠カラコ 石籠カラコ 蛇籠カラコ 駕カマ 具文カマ 摘タマフ 也

石籠カラコ 三材圖會石籠判竹或用藤蘿或木條編作圈眼大籠貯石用擗暴水或相接連延遠至百步若水勢稍高則壘作重籠亦可遏止如遇限岸盤曲尤宜周折以禦奔浪併作洄流不致衝蕩壠岸農家瀕溪護田多習此法比於起壘堤障甚省功力

臥牛カラコ 石笆カラコ 以上同

蕃名ステーンコルフ

籠カラコ 堤堰カキ みハ居スエ て水度カナ へハなカニ しがくカニ ふカニ みカニ さきの幅カニ よよ道カニ と化カニ せの上カニ て石シタ 填シタ 浅カニ 本カニ みカニ みカニ へ無カニ とカニ はせの上カニ とカニ はせの中カニ とカニ はせ

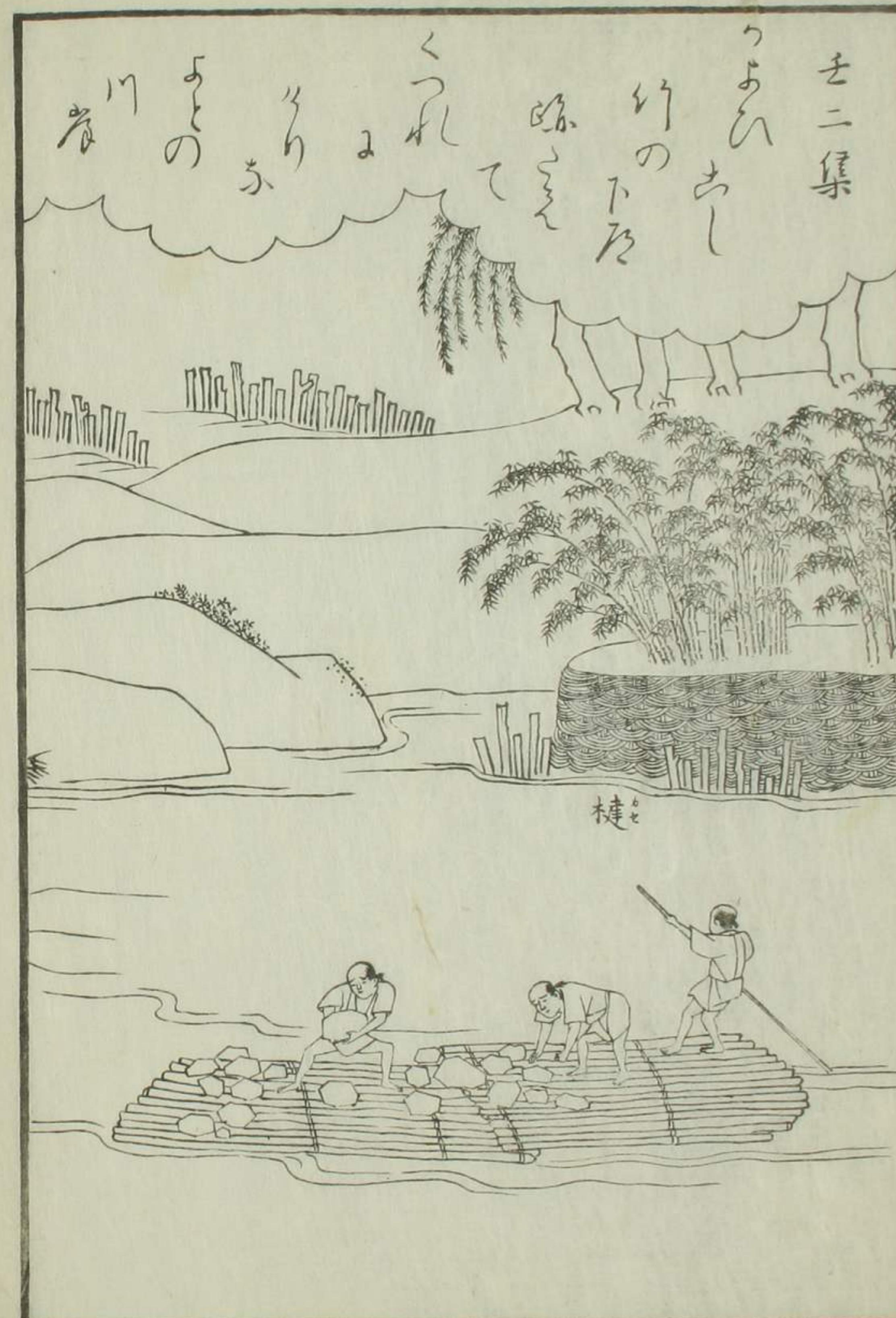


て作^スて石と瓦を施し葦の宿^スとみハ水楊葭^{カヤカシ}草數^{ヨシヤシ}ヒ多
く植^ス付^スし根深くあらうて木とかくむあり又葦みて
解^スるま所ハ石籬^{カブト}と築^ス者ありふ是^レと石壁^{カシマ}ヒスモ^{シテ}替
換^ス松材^{マツ}とて根^スと立一間^{イリ}たり丈丈^{シシヤウ}ち了^スれとお衝^スはと
貫^スし或^ハ竹^スとてかくこ省^スハ小杙^スとすおも^スのき^ス
ハ大石中^スハ細石^スと實山^スと石と植^スありも^ハも^スよ
淺^スて凡^ス中^ス用^スの材^スハ根^スねとつ^ス松^ス、能^ス
土^ス鑿^スて之^スはて打ち又左^スと額^スて石籬^スと^ス立^スよ^ハ
大小^スもす^ス立^スりたみあと上^スあ^スて水勢^スよ^スづ
あ^スし但^ス水^スと^スかく付^ス流^スと^スて土^スあきて窓^ス

○^ク本籬^{カツラ}僵^{カタマリ}ては籬^スと吹くゆゑ水上^ス埋^ス籬^スと設^スく^ス
し埋^ス籬^ス、水上^ス本^ス檻^スとちりそじ溝^スと^スり二^ス許^ス
ぬくわうて川底^スの地^スとより一人^スおとも往くまよ^スや
うふせし^スそ^ス○^ク埋^ス籬^スのまき園^スと川^スの底^ス被^スうりて^ス
ぢり埋^ス川^スま^スとくもしうりと川裏^スと欹^スる^スて^ス
○^ク又石籬^ス設^スぐまう瀧^スの根立^スふくま^ス流^スハ^ス瀧^ス
上^スにふと架^スてま^スよ土^スと根^ス付^スてかくすれハ重^ス
あ^スとて瀧^スの根^スおのれと地^スよ入^スふみ出^スし^ス搖^スぐぬ^ス
そ^ス○^ク大川^スと浚^スる^スハ^ス川上^スより始^ス小^ス川石^ス川ハ^ス川^ス
又浚^スる^ス○^ク川中^ス生^ス洲置^ス洲^ス洲^スり^スよハ^ス洲^ス

左右子標代と家のあとく石義にてはかけぬればま水
勢ふ押まで沙渺おのづく波散より木代柱ハ上の石
築の重^{オモニ}まで湖^{カニ}と土^シ入^ルよしくあして手代の裏
いよ復^リと泥沙漏りてま済^{スル}かく^ハやしてモ土沙^シ
子く流^シを廻し○或曰堰堵^{イセキ}の堰^イハ筋直^{ヨリ}くと堅^シ要^ト
に小川ハ必水行^ス也^キ守^ガたがりて木^シ入^ルへ水淀^{ヨド}ミ土渟^ヒてま
漏^ル川^{カニ}麻^ハく^ハと^{カニ}うて流^シを支^スる^シれ^ムか川^ハ
チ^シ流^シの屈曲^{カニ}が^ハや^ハに流^シを^シめ^シく^シれ^ムと^シ
是^ハ整漕^{ホリミ}乃細流^{ホツシ}のあ^リ○ひ^リ一^ハ坂^ハ中のあ^リと^シ
出櫛^{カタマリ}石堤^{シラカニ}と砌^{ハシ}て水勢^シと^シて自癒^{カニ}があつ^シ、^シ濁^{カニ}傳^{ハシ}

水攻^ミ水^アの第^ハと段^ハより元禄中^ハ河りてモ横堤^{メジ}とあく
溝^{クニ}撤^{ハシ}てモ砾^{ハシ}と新開^{ハシ}て^{シテ}田穀取^{ハシ}と^{シテ}土
民之^ハと^シめと^シる^シと^シうの^シの^シう^シも^シる^シと^シ水^ア源大
和^ハ行^{ハシ}の^シ内^{ハシ}よ^シく^シ游^{ハシ}水^ア侵^{ハシ}て^{シテ}海^アみ沃壤^{ハシ}の^シ内^{ハシ}之
方^ハ石^シ淵^{ハシ}と^シうて復^リ治^{ハシ}し^シく^シざ^ムよ^モり^シう^シと^シ
是^ハ元來^{ハシ}ハ^シ勞^{ハシ}と^シ疫^{ハシ}と^シ泥沙^{ハシ}の壅塞^{ハシ}と^シあく^シ害^{ハシ}へ^シ
くの^シ水^ア団^{ハシ}と^シ築^{ハシ}と^シ水^ア勢^{ハシ}緩^{ハシ}く^シう^シて^シ泥沙^{ハシ}と^シ洗^{ハシ}の^シ流^{ハシ}
あ^シよ^カか^く御^{ハシ}い^シ冰^ア上^{ハシ}と^シ冰^ア溝^{ハシ}と^シ田地^{ハシ}と^シ漫^{ハシ}鹽^{ハシ}セ^ムう^シ



堰

堰 橋 古事記亦真橋ともあり
又或人比井ともあり

杭の字と訓ひ也

機 杣 説文○爾雅櫟謂之
杙字彙欄暨木杙也

川堰 東鑑

蕃名ヘイハアル

凡 橋 ふり橋 承 橋

乱 杣

川除 橋 ほの製あり

籠 橋

川の根

流の一 方 ふ 偏て漫と崩す時
之を用てあ勢と殺り焉也
よ檣所以輔木轉也此云
古呂婆世ある者是あり
川底へ岸は哉多く立てまゝよ
岸と載石と墳ても海水が起しゆより出ハ上流
下流よりてはせよよろし哉直く成野とすれど次又
岸もあれあそ川の大小多く差あふる出ゆば先革

ヒ一反土をも上より築せ沙をせするは竹
て柵と絆の木のせま通ふはやうもくし凡杙の根
の石を埴つし杙の省がえせま通ふもくもくと設るハ小
もも杙保つまし凡杙ハ一省ニ七八本あてよし川底の
根の長短大小ハそ川の清深巨細ニ無くし川底の
根くらはす氣を下據して土柱を川底多きふと堤の
上と斜リと大きひ高さもむかひ○岩渕深く坐まつり
き所ハ舊散材と筏としもみの上より大い小の石と
砂を積み残ともよのと下へ沈つて上より石と積立
つし又若或を蔓縛ふと絆のし川の中より出る上より
石砂を拿せ度數多くするを延喜式曰凡堀川杭者不

論課不課戸皆令戸頭輸之川魚乃出ハ久ニイでじ時の
考シムし出也也さ向の岸よシテ水を縦水乃爲
てわざれ五ノ河溝也とみせよ○凡ノ一き雨乃凌堤レバ
あとの船シテハ上り流アキラメ也よりと赤中より水漏出
はれありと竹芭タケスギの數を擗ハシマトカシモシテもみを
あさなれハ第度タマシ下ヒ梅雨ありおろみハまく壊
る也

加世蓋カセ川塞

田手搦

捷音健溝洫志作捷註樹竹塞水決之口稍々布插按樹之
河渠志武帝自臨下淇園之竹以爲捷塞次口註以草塞
其裏乃以庄填ハシマ之也

蕃名ドインヘルム

凡海川等の堤涯冰食以シテは所シテは竹芭茅タケスギ城うれ
す宣し古事景行卷曰定淡水門又作坂手池即植竹其堤
也シテあり竹芭樹タケスギハ土かくら爲りシテは畿内河
功紀曰水至柔而能攻堅凡當其衝者雖鍊石必壞故以力
爭之者卒不能勝焉竹捷柔軟而狎承而制之則水無所施
其激搏之暴而自得循軌而行貞享中治大坂河也多下竹
篠分押接樹以爲捷凡一百八十餘丈本邦未嘗聞有爲
捷者今始用之シテは然シテ也景行の御時以竹植
堤シテはとシテ即捷あり但古文簡シテて人シテ捷シテ也

察シテ水耳

水畠ミツタメ古事記

田中井戸 催馬樂歌○鈔より田中の井戸ハ池と掘て水と
ふ也ハメニ 濶井 水塞 由利アリ開田耕筆より田名を取井より
河井カワエ

陂塘ボト農政全書○禮記畜水曰
蓄水潦クモリ或修築キョウツク堤ダム以備灌カク既ヨリ田畠タケ

蕃名ワアトルコム 亦ヘイフル

澗池カニラ溉ゲルく所の田所と池田カニラ骏河風土記池田

神社ハ所祭事代主命祈雨祭之シテあるうおよひ之觀る
正字通俗壅水溉田曰睥田農の澗カニラ一用水一種物
三今澗カニラこの三つとえてハ田カニラ也アリ又五日乾ハ三割
達カニラ十日乾ハ五割換カニラえ崇神紀カニラ多開池塘カニラ以寬民業
是今カニラの澗井カニラの始より垂仁紀曰令諸國多開池溝數八百
以農為事因百姓富饒カニラ天下泰平也アリ乎もては陂塘カニラ
蓄カニラ水流と導きて高仰僻隱カニラの地といつてと呼ま治て
稻田カニラとあしめりなり水計カニラナ所の田へ引籠カニラき水小立
而原平均深三寸懸カニラと見えり澗井カニラハ山と併爲て堆カニラ
塚カニラあり乳カニラ所ハ申す井と呼て名と號あらわせて澗

里水ハ水勢と勁ざれハ水輕て保ミサシニし或曰澗カニ針と仕立。又埴土と馬糞とまじつて切丈をと面よ塗て乾固。圮ハラヒ塙カニとは復塗也。土中と凍イテ塙カニとしてゆく保ミサシニ又曰雪。又入て二月の内雨ハリあざれハ望年旱ヒタツヒヤウにて極付カニ。しかば時ハリも特ハリしき澗針カニハ水深カニ。天水場カニよりハかねく澗針カニとよづらへ。至常カニは修繕カニまくし澗針カニとよく水之カニ所カニハアざりありともいふ。而て川をて歩ハリ十步の下カニても水田カニとあひ角カニ。○凡軍損の所ハ澗池カニと塘カニと渠カニと並カニ地燥カニ上カニ水浅カニ乾カニて池カニは水たまカニ。ざるカニかわせ其場カニに堀カニと枝カニ又ハ柳カニのみと植カニて

寧カニは一あみとて水おのつゝ澗カニうすり又沿田カニの水抜カニ、所カニけ田カニの水カニたまほの水田カニの中カニよ堀カニと植カニ水と。澗池カニとよづらへ。さもれハ田カニ小澗カニ水深カニよど高カニに便カニ。○後紀曰許曾部朝臣帶麻呂等言大和國廣瀬郡田疇多數灌漑カニ之水伏望以公田七町築堤カニ為池同利公私其功食等並用私物許シ。○周書地官稻人掌稼下地以豬畜水以防止水註以水澤之地種穀猪畜流水之陂也防豬旁堤也。

械カニ書紀○又渠槽カニの字と訓カニ。注渠槽カニハ木庫通水道者是鐵具の梭カニと同義也。按玉篇械決塘水類篇通波竇和名鈔引。

杜甫

六月青

稻多千

畦碧泉

亂插秧

適云已

灌引澑

塘加溉

方渠

更僕往

當新岸

公私各

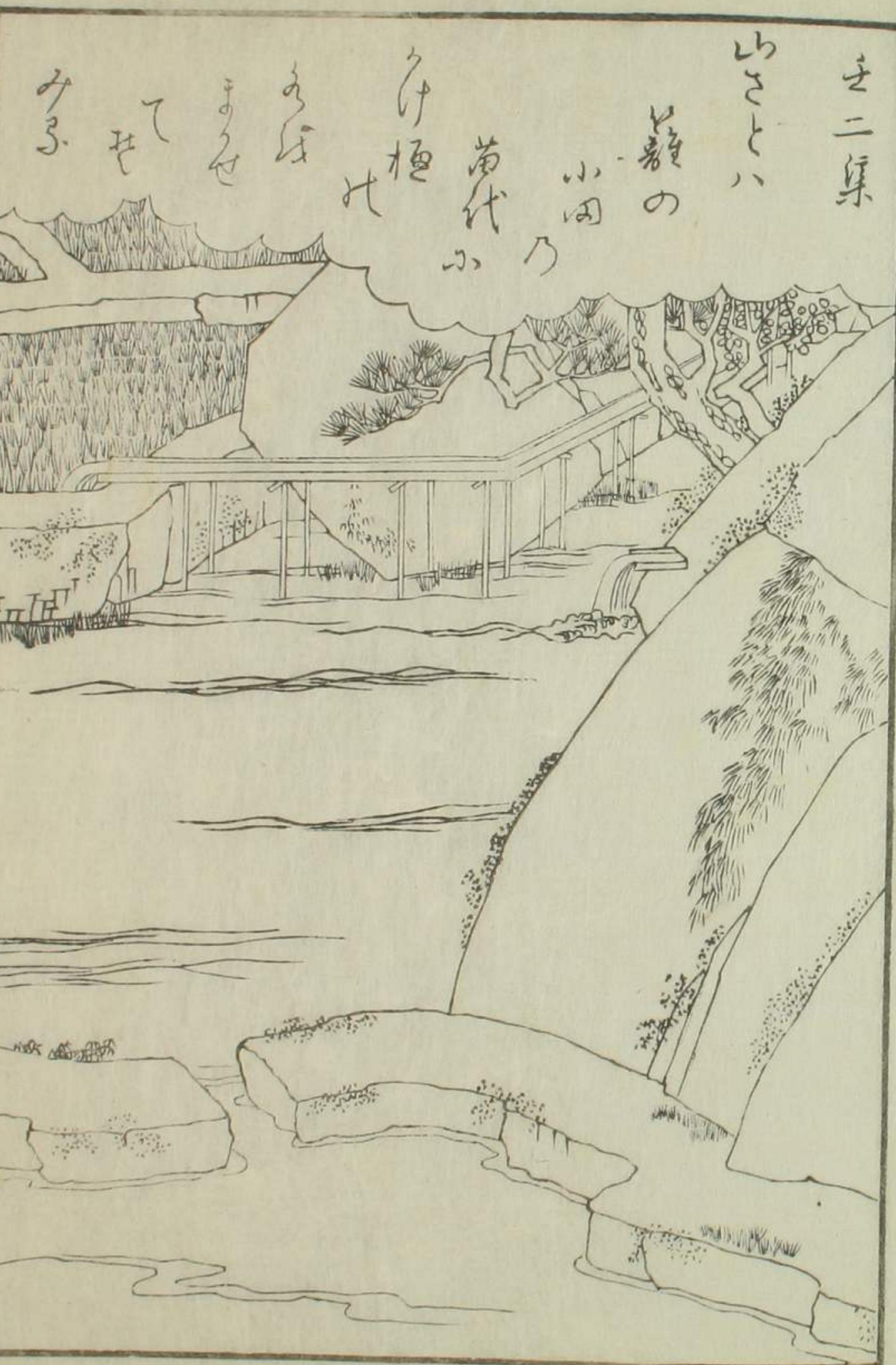
地着浸

潤無天旱

之二集

成形圖說卷之十二

三十九



淮南子決

塘發

械

古事記

○万葉集

同

私記

土下度

樞也

按俗

田

下通

言土樞亦底水道是

近

即暗溝

陰覓

是也

乃樞

新撰

字鏡樞

瓦樞

新六帖

跨越

道

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

夕ハ瓦樞

ト瓦寶

トニテ意

下開

尺八

尺八

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

瓦寶

農政全書

瓦寶

泄水器也

又名函管

以瓦筒

兩端牙

鑄

相接置

於塘堰

之

中

時

於田水

須

預

於塘

前

堰

內

疊

作

石檻

石檻

以護筒口

令於啟閉

不然則水湊

其處

非難

於室塞

抑亦衝溢

滲漏

不能久穩

必立

此檻

其寶

乃成

函覽

錢塘湖

石記

陰寶

同上

○左傳

自其寶

陰寶

入宇典

寶

水道也

蕃名ドイクル

澗池を天水田の傍に造る所の多し池の内より尺八と云ふ

尺八とは孔七ハより十三四又云れ
尺八と云ふ者有れ
底水通城通し田へもとくもむすり彈正式より置通水
うわもと下通と云ふ也攝津風土記山伏下通而從此通
内通云々田より水りあらどもうつみ上一畠の楔と抜去
止め尺八のけ城めりて田代へ源を溉く夫少く足
はる第二當用の楔と爲ふかやう小脇とひきぬ小楔
と抜去とて澗池に水を蓄て放きたり夫少く又八尺
八の楔を挿すれば雨ふる水渟めふと云ふやも唐
白居易錢塘湖石記一名上湖周廻三十里北有石函南有
筭凡放水溉田毎減一寸可既十五餘頃每一復時可既五

十餘頃是人八の水ばかりとれ回し 又白居易石函記

里

懸桶姓氏錄械の字と刻正新と帖みやくくらむ掛道

通桶架越

架槽三才圖會木架水槽也間有聚落去水既遠各家共力
造木為槽遞相嵌接不限高下引水而至如泉源頗高
水性趨下則易引也或在窪下則當車水槽亦可遠達若
遇高阜不免避礙或穿鑿而通若遇坳險則置之以木駕空
而過若遇平地則引渠相接又左右可移隣近之家足得借用

連筒

同上○杜甫詩

規

類篇通水器亦作笕水

笕也集韻以竹通水也

蕃名ワヤトル・レイディング

井桶和名鈔○械の字と為比訓と書紀又は械と比
桶の義より勝間田の池乃いひあと詮め里

桶口

閘門正字通舊注同肺今按漕艘往來石左右如門設版
曰閘河設水時啟閉以通舟水容一舟銜尾貫行門曰閘門河

閘官司之

斗門大學衍

水閘

三才

圖會

蕃名ハルデユール・ハンデイキ

閘ハ備蓄洩之溝とハ田へ水をかけりあつまつと伏
せ小淺く伏す者也あつてあ後の比較より深く極伏下
土と平より均し闸ヒ伏兩端ヒ堅實て盈余をも一闸の
つより少ふ者の内堤のあとある所を築てよし是ハ大

水の内側の戸と開け又開弱くなりやうとする内志石
砌を築て闸の戸を三重とせき内又投入
ざまうち凡用小ハ通一尺四寸とモ水ハ百町の田セ
音みどりアリ王禎稻論云蓄波塘以瀦之置隄閘以上之
○落堰ハ澗之所と堰也うるに多く人力或用も上堰さ
ラアムリ工夫と費やそり少し間數多きも淺ま所と見
計い極深を無し水よく通すと堰さへアムリ工夫と省
あ里落堰久姓せよ先一をん堰て名サし通じるもうち
西○忠水落堰ハ川より堰めて川上と細河下と落く
堰而し是水と多く満たす事ひゆうなり○用久ヒテ落堰

右川上を度く低く川下せ細く高く堰てよしもうちざ
れを下流より引續ざし之川下より堰めて用久
ビ左方の地へシテ落堰シ 堰の坪を一坪大抵人足二人
又四人ばかりあり

金綱井書紀○今言絞車井あり太平記福卷と書あり今繩
ハ之素に鍛索や用わしよ 卫金綱 といひしちり

彈罐

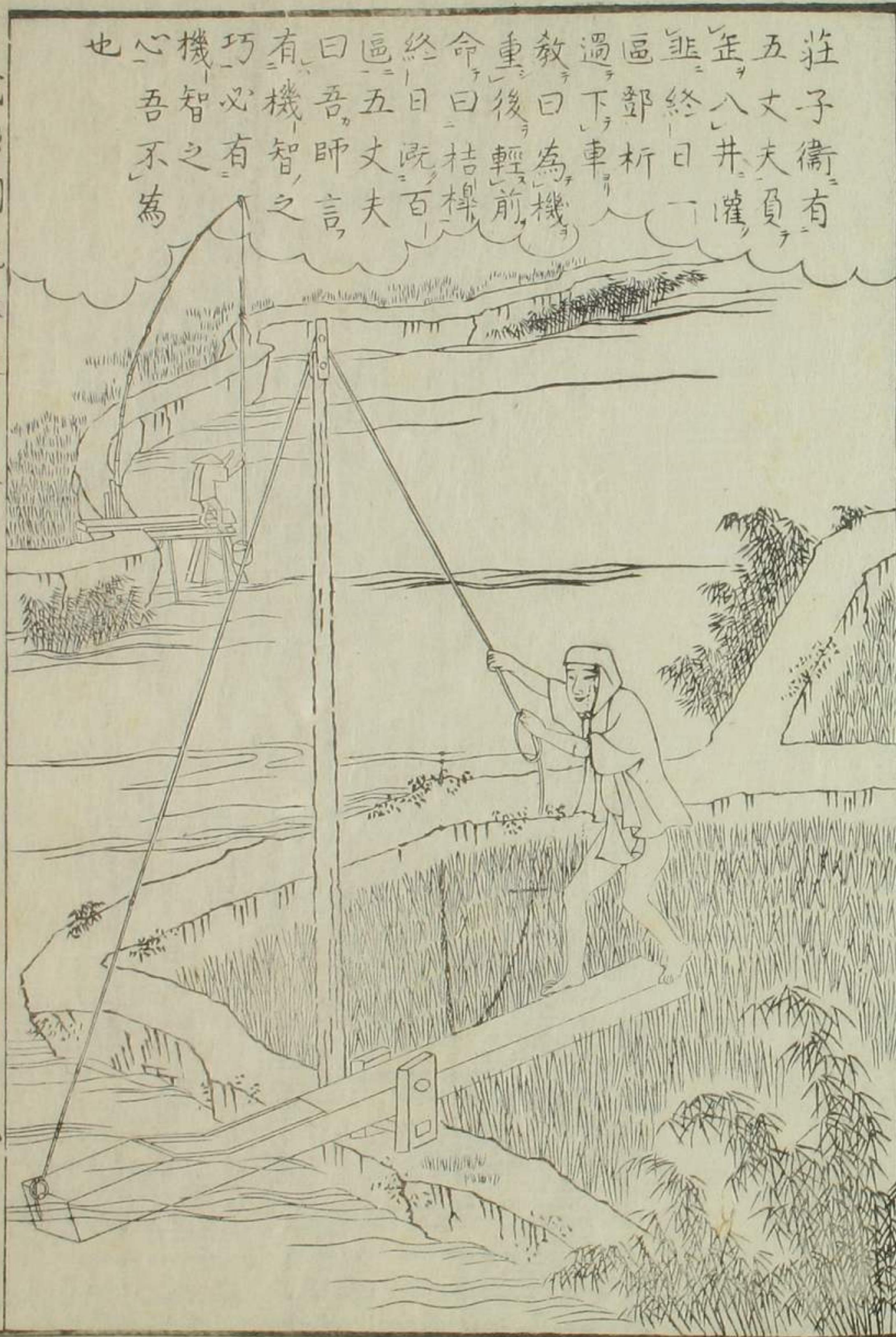
桔槔 桔亦作櫟莊子桔槔者引之則
倚含之則仰通俗文機汲水也

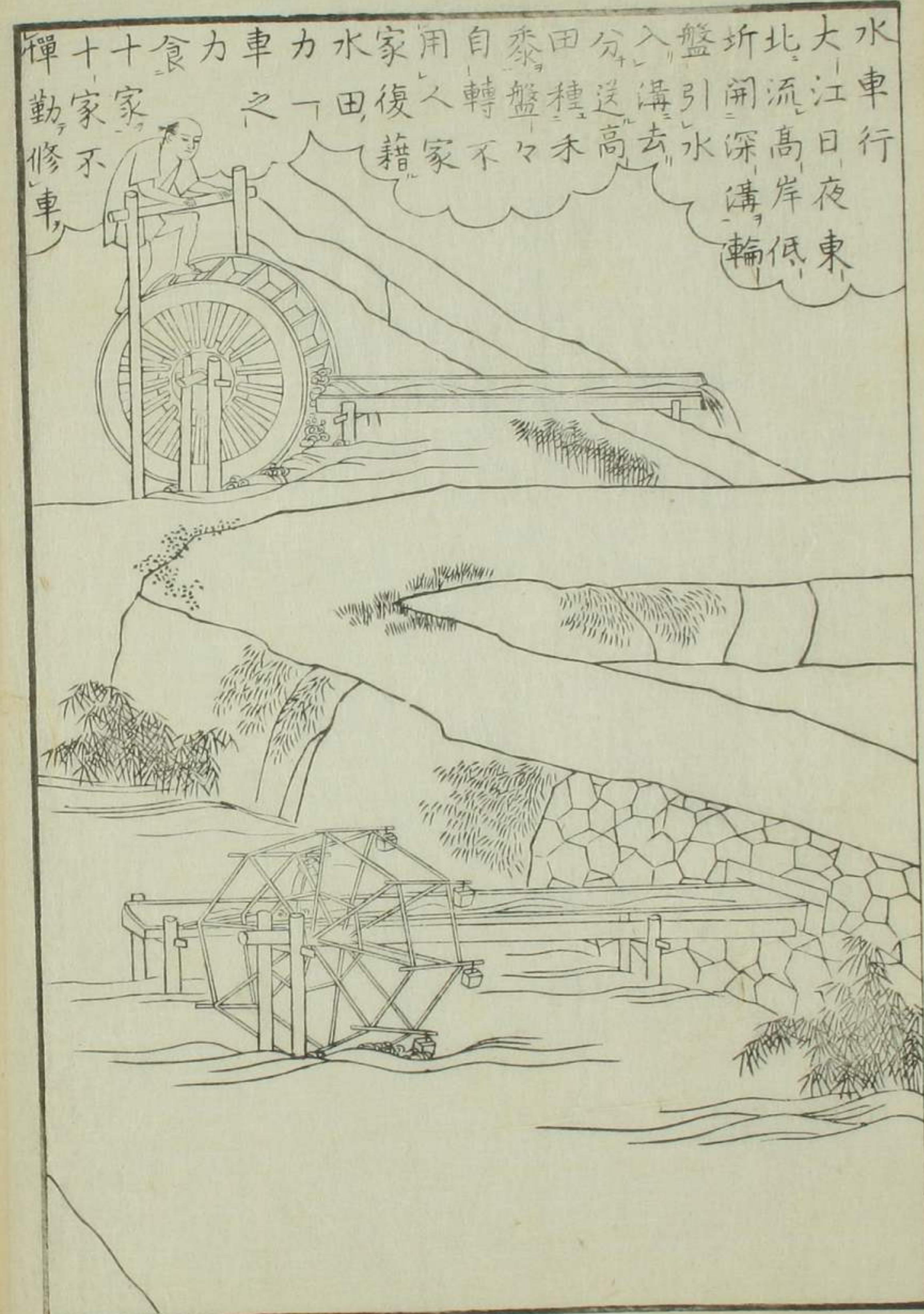
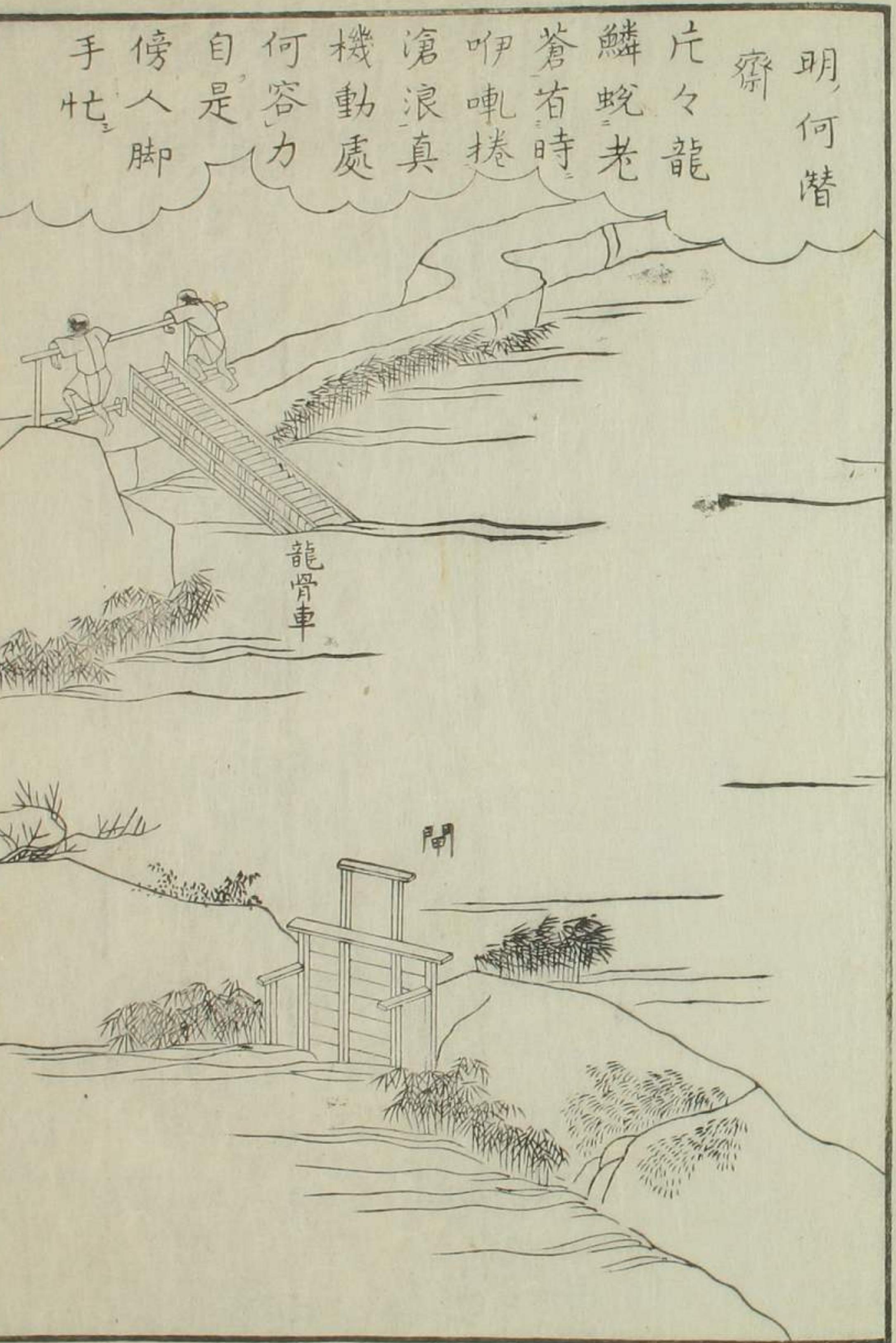
蕃名ヒエット卫ムムル

此の用力少、而見功多と称せ然ても數千畝の田
 が水盛盈むるものは升戸多く取引く也あく事な
 らも川渠の所は水上より架と構て巨竹とし、磨
 て約りけて槽より田より汲かんはようし
 技罐和名鈔罐、汲水器豆、流閉口、訓めり即
蔓巻の傍あり、巻といひ、み／閉く
 水斗品字蓑、提水者禮大記木角註角、水之斗廣
韻、岸斗舟中、漁水器也。是今之阿加登利なり
 蕃名ウ卫ルブ卫シムル

たりあ人相對して生緒便成熱て稻田一擲溉ナガシとのあを

水車日本後紀





利宇古志

即龍骨車の約語也

筒車

三才圖會於一輪之一週水激轉輪衆筒兜水次第下傾於岸上所橫木槽謂之天池云翻車今人謂龍骨車也行道板一條隨槽闊狹人憑架上踏動桺木則龍骨板隨轉循環行動板刮水之上岸又踏車蹠車牛轉翻車牛曳水車等の製あり又龍尾車恒升車玉衡車も亦斯変製あり

蕃名ワアトルモーレン

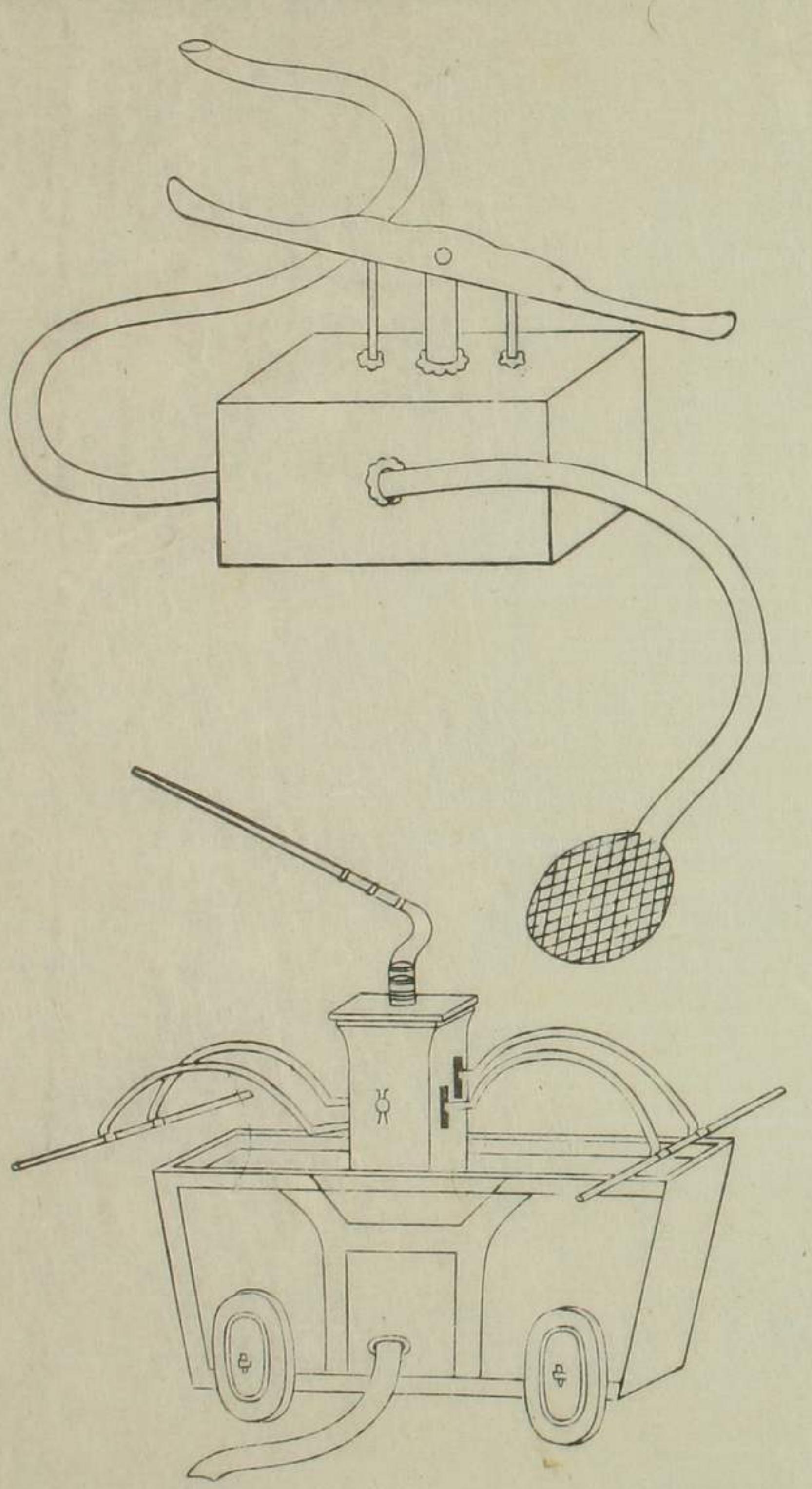
日本後紀天長六年夏五月太政官符曰大納言安世作水車云云以為農業之資其以手縛以足踏服牛廻等各隨便宜若有貧乏輩不堪作備者有司作給今按以手縛ハ龍尾車の類より輪軸のたゞく以足踏ハ即龍骨車也服牛ハ牛轉翻車あり徒然草より後の御池より野川の水

ヒ引ヤムむとて大井の土民に仰てみ車と造られに
ア多の錢と給て數日又言出一トテ無事りムよ大了
轉うりきれハねうらの里人と召て拵させられ又れハ
安らうに経てまわくせうりうるゝ事ニヤシよ轉てあ
ヒ以入ることぞいからり○夫木集あつめきるう
治の川流の水車をとどめて更に外は外は外は外は外
駒乃頭^{カシラ}名物六帖○是車の水汲桶と板と打て
渴鳥^{カシラ}後漢張讓傳作翻車渴鳥註渴鳥為曲角以木引水上渴免水渴並同

蕃名

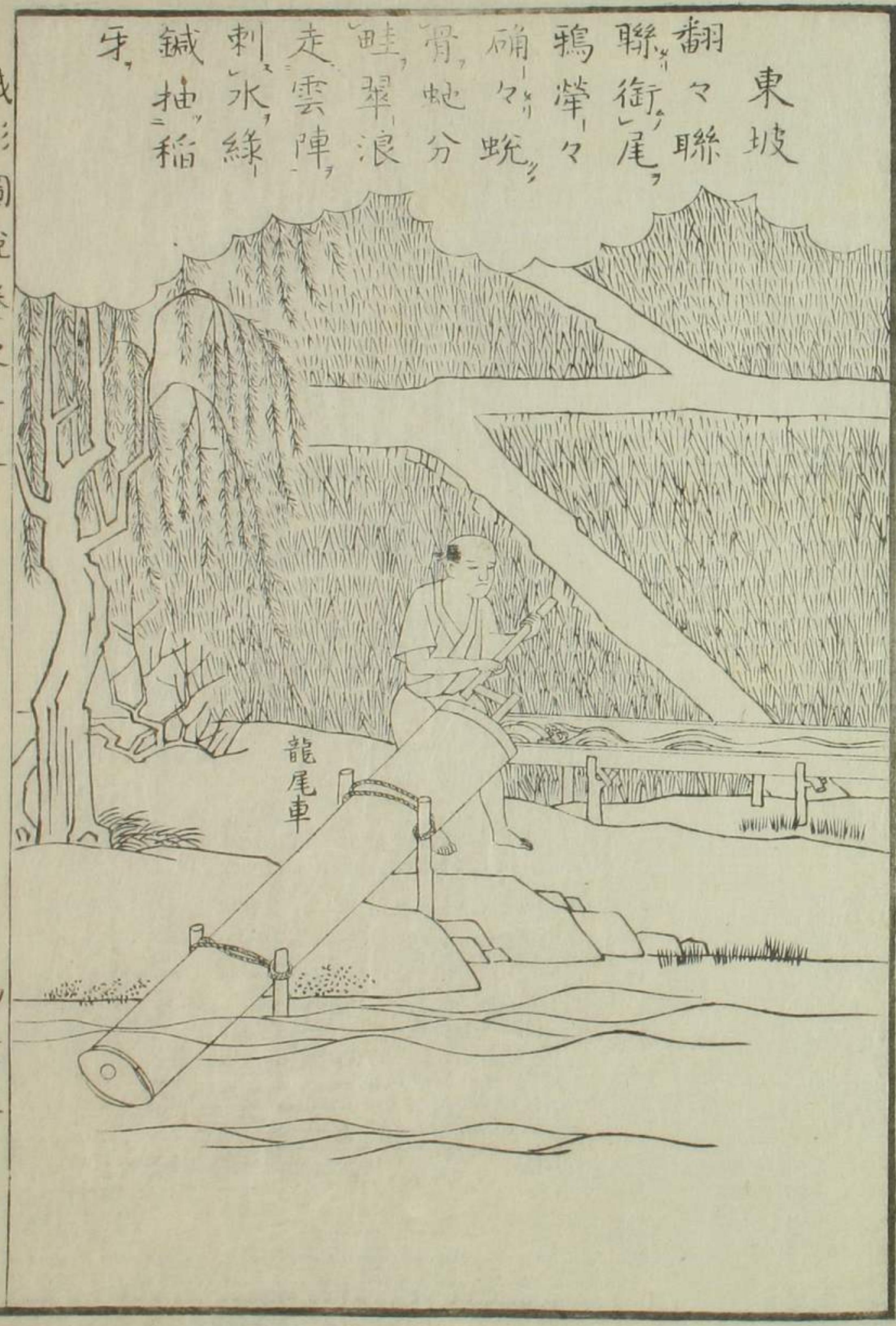
恒升車ハ俗言龍吐水也もくろニシテ製ハ革或ハ布也
轍カスとこゝろの局のやうして五十石よりを運びて之を
の一湯カツキヒ井泉の底より浸て左右より藉クルマかじよすて
ヒ汲昇せし上の一湯カツキをぬり所へ振つり落ハラフく
あすきは龍尾車字の及ざる所の壁立湖淵の冰よりと
そ黑カスとれてこれハ山よりかのむくセ又冬より遅まじ
てち轍カスヨハ相油といふ漢墨めてあと残ホタリまとと
おり轍カスあれハ底伸匂カスゆふ轍カスヘ引つるやくもよ遠ハラフ
地の因所ともうくもえけりかゆどとくみゆくも此
和蘭の製にて蕃名スボイトといふ

恒升車 蕃名數模スモイ以鐸



龍尾車ハ河底より水を引揚るの器あり累接して水と
上れも山みをくわじてしむ一人の力にて田二十
畝とうほは夙の功をまどへ一此の肉子螺旋の孔道
ありかハ圍してみど洩さぬ旋子^{セイ}升る長一丈ぢ
れハ水の高さ人足三四五の句股の法ありこれと足ふ
へも升うむ機斜の度^{ヒゲ}一人まよひ

龍車ハ山陽道よりみて水田に用ひ者也方一間許の
箱の底を咬達^{ビタカ}小升^{スモウ}と川の幅を浅く供て箱中に螺旋^{テフ}
鉢の板と箱柄と附て押とさハ板窄^{スモコ}で引ハ板寬くやう
かしてあ其勢につまて升るあり柄の端を揚^{ハシ}り



玉衡車も井泉の水と挹^イりくよ水渾の製のよし
て田畠の旱のうよ一井とひてみと灌も數畠を漫へ
し一人きて一窓ヒ勧せも百泉逞上して高^{タカ}ヒ升^スり
あひ大旱^{タガ}わらとも教計ヒ合て人力相代^シ汲取^{ハシメ}ハ敷
町の田とも乾涸^{カク}ざるや是江河泉澗のあひて高^{タカ}の
上よ越^{アツ}さるめ屈曲の盤道^{ハラマ}ヒ波^{ハラマ}しつきの様巧^{ハラマ}り

水碓^{ミツ}書
紀^{ウス}
水車臼



宋耕織圖

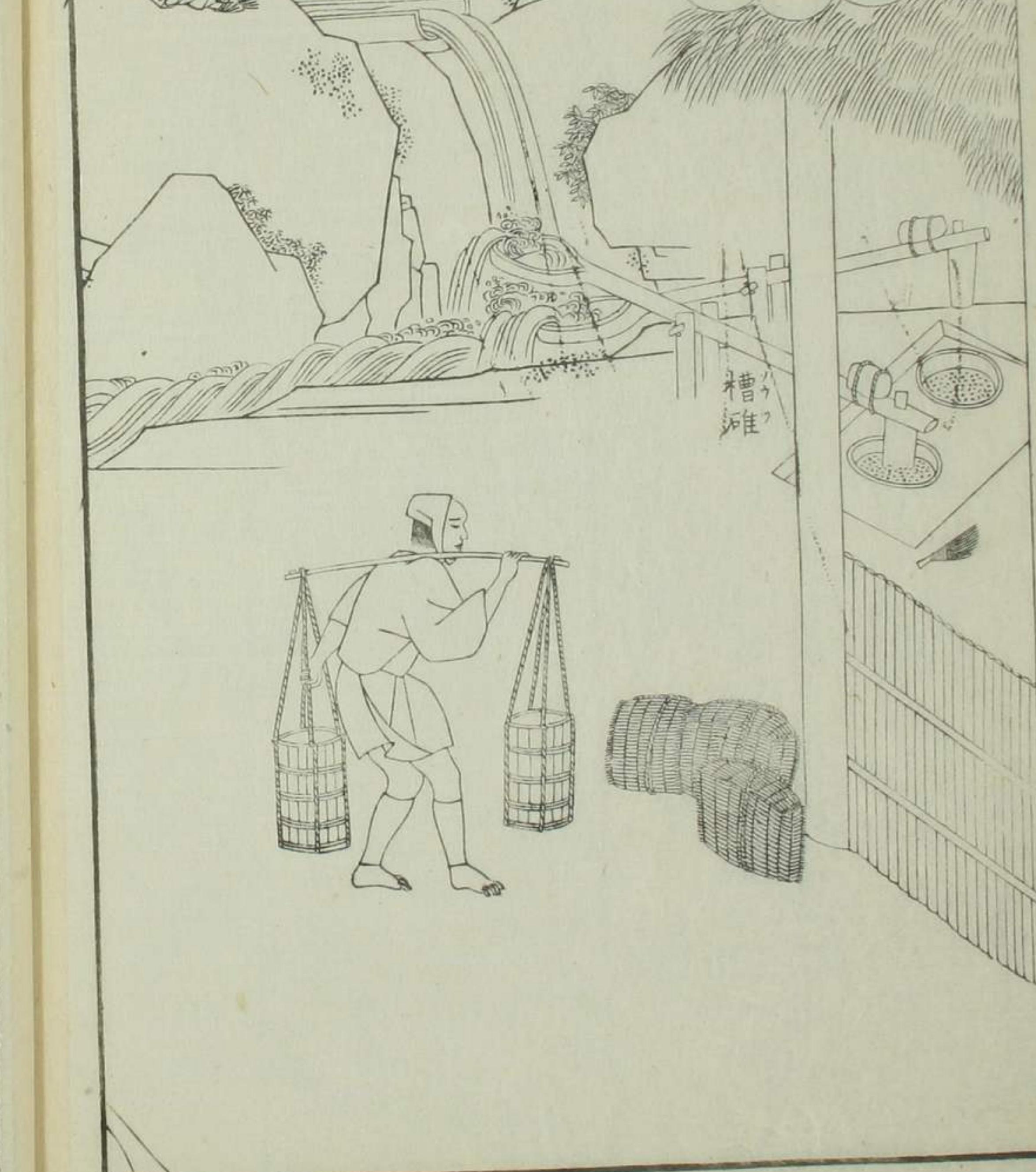
娟々月過

牆，蔽夕風

吹葉田家

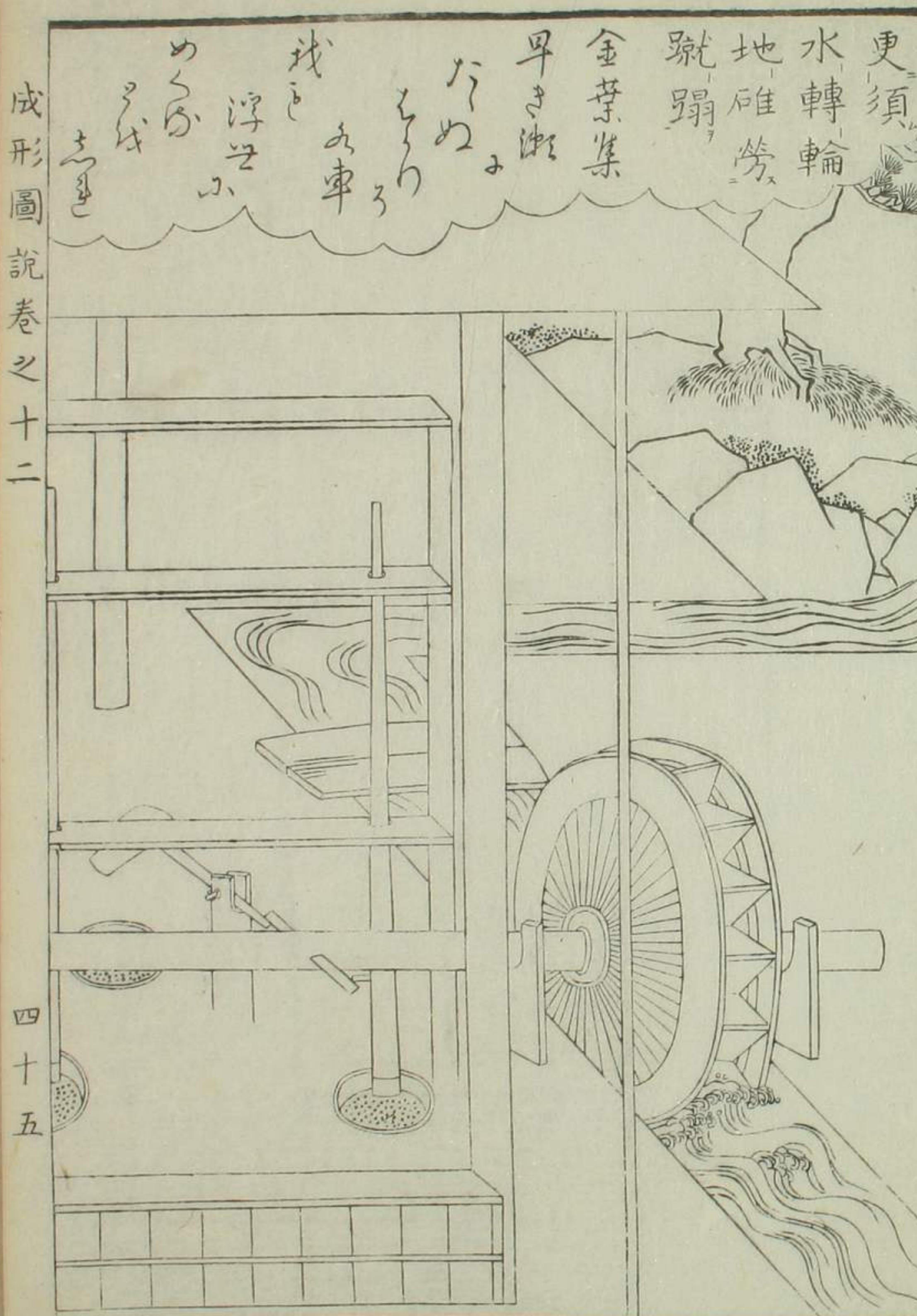
當此時

村春響，見香，炊玉，行間，答，相



成形圖說卷之十二

四十五



水碓ミツウ増續韻府○三才圖會機碓水搗器也桓譚新論水碓激使自春即其遺制也又轔車水磨水碓水

甕水轉甕也水轉碾也

蕃名スダメブモーレニ

天智紀九年造水碓而冶鐵式ヨリ此事載シテ又生鍛
而前落即爲一春ヒコ如此晝夜不止可得米
兩斛ヒキ天智紀十年獻水臬ヒツリ○漢

槽碓ミツウ三才圖會碓梢作槽受水以爲春也凡所居之地間有
減細後梢深闊爲槽可貯水斗餘上莊以夏槽在夏外乃自
上流用笕引水下注於槽水滿則後重而前起水瀉則後輕

曾布豆

島威の曾富騰ヒタチ出川足勢かどりて向者又

無名氏詩野碓無人水自春之多益水牌よ

止ヒタチあ了ヒタチ今備中國曾布豆谷

此者ヒタチ僧の玄賓ヒタチ仰承ヒタチ所ヒタチ付ヒタチ

曾布豆石左近俗言

太郎水鳴子

勺ヒラ正字通山居
者剗木爲勺

水臬ヒツリ天智紀鈔準繩の字ヒ前め也

水臬

水繩

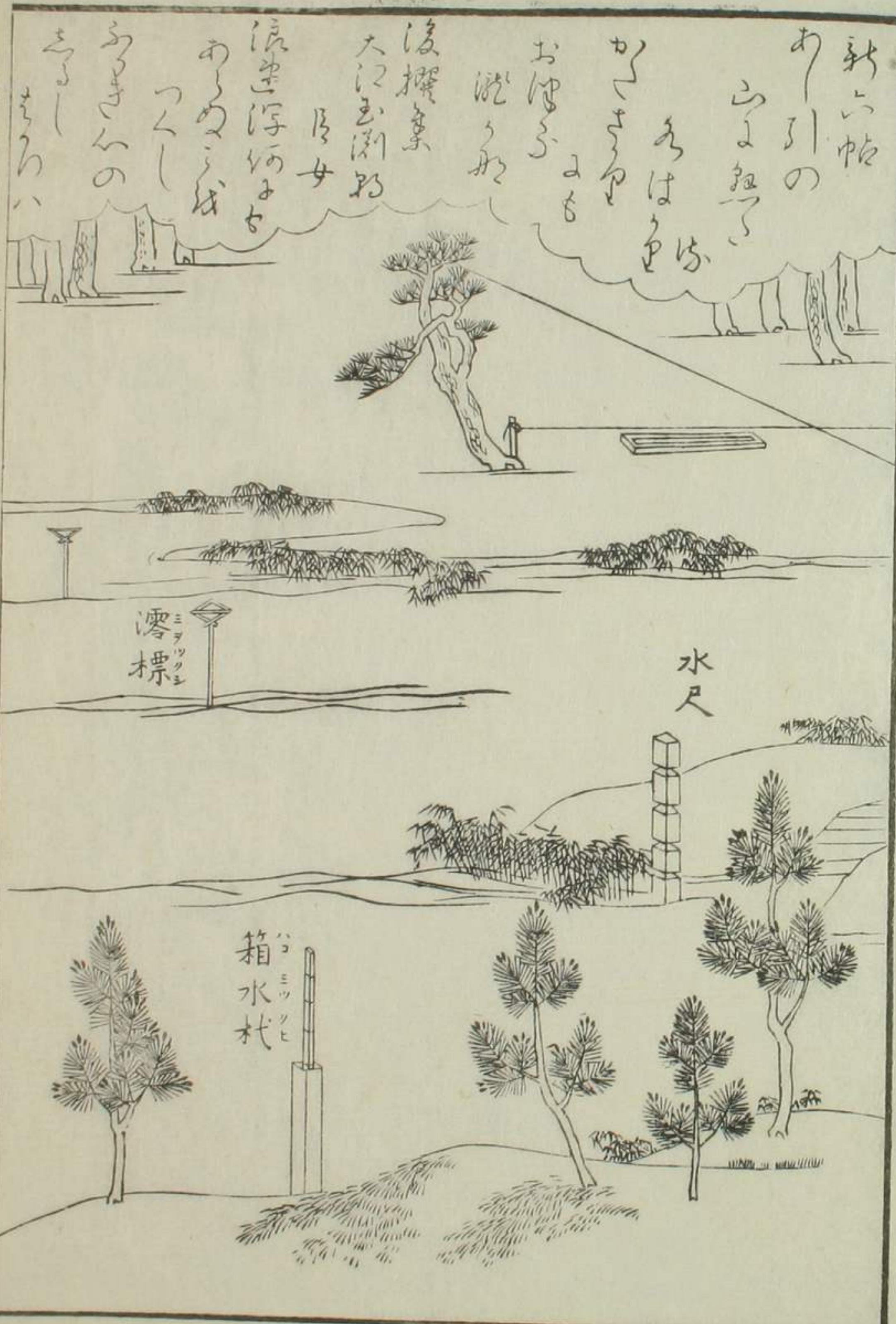
水平ヒラフ通典木槽長二尺四寸兩頭及中間鑿爲三池三池各置浮木上建立齒以水注之三池浮木齊起眇目視之三齒齊平則爲天下準置照版度竿亦以白繩計其平則高下丈尺分寸可知謂之水平○衍義補疏家謂以水平地於四角立四柱於四柱以水望其高下即知地之高下然後平高就下而地乃平殆今世所謂水平也

孟子○前漢律歷志繩直生準準者所以揆平取正也○繩音齧又與闡同考工記匠人建國水地置繩以縣疏繩柱也

以縣者欲取柱之景先須柱正欲柱正當以繩
縣而垂於柱之四角四中繩皆附柱則柱正矣

蕃名ワアトル・パス

凡平原の地より小渠澗と疏さんとすよとの地西乃
高低とすりざき付ハ夜申を將す橋らんとするの地
而の一町或ハ市町無す葦火と松し川上川いより之と
空に觀るよ其火光の高低と察て之比而の蘿夷と審也
而し又川流の淤泥と浚へはるも舟の上す葦火と焚て
そ火炎とつまることて川面の淺深と識出とあり漢備池
志觀地形令水工準高下河内圖會よ譽田ハ幡宮四季神
事の中正月十四日月新とえて曲物すみと入板す同ビ



トヤ年中比水計何合トモ是称宜の役あり

水脉津籤萬葉集ニ水尺御石と填トハ尺の義訓ニ
有しノは木ヒ立ててみの源流ビモカホリのムリ○又
衡石ニ書るハ原木ヒ衡樹シムヨリもんとちかくシ
年山紀用ニ恐ハ越乃深放と

あるハ却てくも一からを
水尾木尾或深の字ニ江河湖海ニ携モル所ニキヤ
水則則幢製如杆徑七八寸出土可三尺餘其趾入土不知
亦深遠と

水標

水尺

西湖志吳越王錢鏗築塘ス捍江水置鐵幢三枚為水
則幢製如杆徑七八寸出土可三尺餘其趾入土不知

于若

蕃名メートパアル

類聚國史難波江始立標○雜式曰凡難波津頭海中立
標若有舊標朽折者搜求拔去之學曰冰尾標等ハ若
葉遠津淡海了佐細江又もよりこれと並波津ハ大宰府
ウカセノマサノヨシアリハいつともレドア
子多島シ○冰標の一體に川中へ大船の柄を建物の内
子半ト伸て半の半ナツツノ舟の口より上浮出ハ
ハト高ナクあり是モテめり先遣トモクモナリ冰魚増し出
れハ半愈もくね出るゆゑま方よりとものむ呈ド

成形圖說卷之十二終

